

「善きことは」

文・山下太郎

タイトルのフレーズは「カタツムリの速度で動く」と続きます。マハトマ・ガンジーの言葉です。ゆっくり着実に進むカタツムリを見ているといろいろなことを考えさせられます。一茶は「かたつぶり そろそろ登れ 富士の山」と詠みました。諸説ありますが、カタツムリの時速は人間のおよそ1000分の1だそうです。カタツムリの「速度」でも、「時間」を味方につければ富士山登頂は計算上可能です（そんなカタツムリはいませんが）。これに関連し、「塵も積もれば山となる」や「点滴巖もうがつ」といった格言を思い浮かべることもできます。

たしかに「距離＝速度×時間」の公式を用いれば、何だってできそうな気になってきます。ただし、「速度」をゼロにしない限りは、「三日坊主」という言葉があるように、人間にとってこの速度を一定に保つことはじつに難しいことです。勉強の成果は、この公式といかにつきあうかにかかっている、と言い換えることもできます。一定の成果を上げるのに、細く長くいくのか、一気に成していくのか。もとより正解はありません。ただ「努力は裏切らない」ということは、この公式から導ける真実だと思います。

しかし、と思うのです。人生の諸問題はこの単純な「速度の公式」だけで解決できるものではないのだ、と。こう言うと「そんなことはわかっている」と誰もが言いますが、私は一歩進めて、この公式が人間の根深い先入観を形成している事実を目を向けたいと思います。

たとえば「子どもは大人の父である」というワーズワースの言葉があります。「年齢を重ねるほど人間は大人になっていく」というのは私たちの「常識」ですが、その考え方がすべてではないことをこの言葉は教えてくれます。たしかに経験の多寡で言えば、年を重ねるほど経験の絶対量は「多い」ということになります。これは「速度」の公式から簡単に導ける事実です。では、経験の「質」はどうでしょう。質と言ってあいまいなら、「心のときめき」や「感動」はどうでしょうか。幼児に軍配が上がるとしたら、これはどういうことでしょうか。

現実的な例をあげます。学校のクラス担任に関して、経験年数の多い少ないが「指導の質」とどう関わるのか、という問題はよく耳にします。私は「経験」×「年数」の結果がすべてを決定するものではないと考えます。

このことは子どもを育てた母親なら誰もが知っている事実です（しかし忘れず）。たとえば三人の子どもがいるとします。母親の「経験」×「年数」の計算で言えば、3人目の子どもは1人目の子どもより条件的に「有利」ということになりますが、本当にそうなのでしょうか。むしろ有利も不利もありません。単純な「速度の公式」を超越したところに大切な「何か」があると思われるからです。

「速度の公式」はカタツムリにも適用できますが、人間にあってカタツムリにないもの、それは夢や理想を見る力です。この心の輝きが情熱となって人間を富士登山にも駆り立てるのです。実際、人間以外の動物で「登山」する生き物はいるのでしょうか。世の中には様々な人間がいます。様々な人間に様々な夢があり、それが人間社会を形作っています。誰にもその人なりの「富士山」がそびえ立ち、その登頂を志す自由があります。この志に老若男女は関係ありません。（次ページへ続く）

先に示唆したように、子どもを立派に育てたいという思いは、学校の先生であれ、子育てをするお母さんであれ、経験年数とは別次元の問題だということです。同じ原理で、学校教育の現場で、教える者が学ぶ者を尊敬することがありえますし、家庭でも、親が子から学ぶケースはいくらでもあるわけです。

このように考えた上で、再びガンジーの言葉に戻ります。ガンジーの言葉の主語は何であったか。「善きこと」とあります。何が善きことであり、尊ぶべきことなのでしょう。先に「理想」や「志」という言葉を使いました。確かにある時点で「志」の輝きを比べれば、大人も子どもも違いはないということは言えるかもしれませんが、しかし、子どもになくて大人に＜あるはずのもの＞、それは何でしょうか。私は「理想を見失うことなくひたむきに努力を重ねる年月の蓄積」だと考えます。

この＜あるはずのもの＞が本当に自分の中にあると言えるかどうか、その自省を促す点でガンジーの言葉には深い含蓄があります。子どもは子どもの父（導き手）にはなれません。真摯に努力する大人にとって、手本やヒントになることはあったとしても。現実社会で、一步一步夢や理想（「善きこと」）に向かって歩み続ける大人の姿こそ、同じく理想を追求する（可能性を持つ）子どもの真の導き手となるのです。たとえ、その歩みが遅々としてカタツムリの速度と揶揄されるにせよ。

（山の学校代表 山下太郎）

◎春学期の時間割◎

	4:20-5:20	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
月			かず6年	
火	しぜん A・B(隔週) かが A(隔週)	ことば1年A ことば5年 かず3年A	ことば6年 ギリシア語入門	ラテン語初級講読A ギリシア語講読
水	かず1年A ことば2年	かず2年 かず3年B かず4年	中1英語の基本 古文講読	ラテン語初級文法A 高1英語の基本
木	しぜん C・D(隔週) かが B(隔週) ことば4・5年	かず5年 英語指導A(一般)	高2英語の基本 高1・3英語の基本 英語指導B(一般) ラテン語初級文法B	高校・数の基本 ウェブプログラミング入門 ラテン語初級講読B
金	ことば1年B ことば3~5年	かず1年B かず3・4年 かず5・6年		ラテン語初級講読C ラテン語中級講読

●新しい講師の紹介●

4月から着任した新しい先生をご紹介します。

小林 哲也

京都大学大学院 人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期課程在籍。小学生の「かず1年B」を担当していただいています。

梁川 健哲

京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科造形工学専攻修了。山の学校事務。小学生の「しぜんA」「しぜんC」「かがA」「かがB」を担当していただいています。

しぜん A (火曜日クラス)

A クラスの仲間たち

A クラスは、5 年生 1 人と 1 年生 4 人。皆、男の子です。初回は自己紹介をしてもらいました。「僕、算数が好き。勉強する事が好き！」と F 君が言うと、「僕も好きやで！」と 1 年生が合唱します。学ぶ意欲に満ちた頼もしい姿です。しぜん教室の大先輩 U 君が、これまでで楽しかったしぜんの取組みについて教えてくれました。「ツリーハウス、はつか大根、イチゴ、やきいも、よもぎだんご…」すらすらと出てきます。そして「またしたい！」とも言ってくれました。「…それからバームクーヘンも作りたい！」昨年参加できなかったので今年こそはと意気込んでいるようです。

「しぜん日記」

しぜん教室では、自然に関する出来事や疑問などを自由に記録し、毎回の教室で発表する「しぜん日記」という取組みをしています。例として U 君がこれまでの日記の中から 2 つを発表してくれました。「天体望遠鏡で見た月が眩しいくらいに明るく、土星の輪が見えて感激した」「黄砂がすごくて家の車が黄色くなった」1 年生達は感心した様子で聞き入っていました。

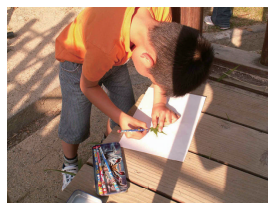
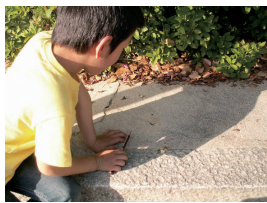
その後、ある出来事を皆さんに紹介しました。使い残してすっかり放置してしまった長ネギが成長を続け、先が膨らみ、花が咲いたのです。皆は半信半疑の様子でしたが、持ってきた実物を示すと身を乗り出して次々に手に取ります。「何これ！」「うわー、ねぎの匂いやー」「いい匂いがする！」「臭いー！」1 人が刀の真似をして振り回すと、ねぎはぽきんと折れました。「こんな風に身近な事の中にも発見があるからね。しぜん日記はそういうのもいいよ。先生はしばらく、このネギを見守ってみようと思います。」

はじめての発表

教室に入ると、T 君の周りが賑わっています。手に持っている箱を覗き込むと、それはどんぐりを転がして入れる迷路ゲームでした。自然を生かした素晴らしい工作です。1 年生数人が日記を書いてきてくれました。Y 君のように何枚も書いてくれた人もいます。皆、恥ずかしがりながらも堂々と発表してくれました。初回は雨天の為、「もし他のいきものになれるとしたら、何になって、何をしてみたいか」という題で絵を描いてもらいましたが、それらも完成させ持ってきてくれました。5 人とも絵が大好きなようです。回を重ねる度、虫や植物を観察した素敵な絵日記が集まっています。別の機会に是非ご紹介したいと思います。

5 月、ある晴れた日のクラス

「先生、今日は何か絵を描きたい！」「先生、今日は外行くよね？」「よし、じゃあみんな、外で絵を描こう！」



H 君が面白い形の実をつけた小さな白い花（ハルジオン）を発見、A 君と一緒に描きます。U 君は摘んできたつつじの花をブランコのチェーンにさして、じっくり観察しながらの写生です。なるほど、考えましたね。その後、丸い遊具の中心に移り、一心に何かを描いています。H 君も次なるお気に入りの場所を定めた様子。「ここ、いい場所でしょ」と微笑んで、ジャングルジムの上からあれこれ見回して描いています。「僕もつつじ描く！」と A 君。どこか見覚えのある光景です。彼にとって同じく絵の得意な U 君は、憧れのお兄さんなのでしょう。「描けたよ！」とアスレチックの踊り場に屈んでいた T 君が呼びます。モミジの葉の形を鉛筆でなぞったのです。「こんなのもできるよ」と落ち葉に重ねた紙を擦る方法を紹介すると、熱心に試しています。その後皆で色々な葉を擦り出しました。

虫が大好きな F 君を、アリの巣へ誘います。「食べ物を見つけたら、蟻はどうするか観察してみよう」ポケットに忍ばせておいたパン屑をちぎって、巣からわざと少し離れた所へ置きます。「あ、第一発見者！追いかける！」一目散に U ターンして駆けていく蟻を追いかけてみます。巣の有る方へ知らせに行っているようでした。T 君も加わっての蟻観察。パン屑が巣に引きずり込まれる度に歓声が上がります。F 君が紙に大きく蟻

の絵を描いてくれました。小さいありの胴体の成り立ちがよく観察されています。A 君のつつじは、ひょろっとした花びらと雄しべの感じがよくできています。T 君はくっきりとした葉脈を写しとる事に成功しました。H 君はハルジオン、桜の木、石灯籠、カラス、目に映らないはずのトンボや魚までが登場する賑わいのある絵です。そして、U 君の絵は何と、完全に心の中にある風景（以前写真で見て印象に残っていたものだそうです）を写し取ったものでした。山の向うに沈む夕陽が湖面に映っています。皆が、思い思いの「しぜん」を、ぽかぽかの日差しを受ながら体一杯に吸い込んだ一日でした。

(文責 梁川健哲)

Cクラスの仲間たち

Cクラスは元気いっぱい1年生5人です。初回の自己紹介。「好きなものは何か」を質問すると、まず男の子達が勢いよく答えます。「好きな食べ物はめだまやき、遊びは野球!」「僕は算数と工作が好き!」「僕はゴーヤが好き! それからおすもうが得意! 亮馬先生に勝ったことあるよ!」「私はいちご!」とKちゃん。Sちゃんは恥ずかしそうに黙っています。「じゃあ思い出したら聞かせてね。」男子が続けます。「それから僕はね、うんこ!」「きゃははは! (一同)」「じゃあみんな、うんこはどうしてできるんだい?」(一同、静まり返る。)'えーっと、食べるから?」「そうだね。これだって『しぜん』です。これからみんなで色々なしぜんについて発見し、考えていきましょう!」自然は、私たちの内側にも外側にも、果てしなく広がっています。

「しぜん日記」の説明をし、ファイルを渡すと早速表紙に絵を描き始めます。暫くして外へ探検に行こうと促すと、誰に言われるでもなく一同ファイルと筆箱をかかえて外へ飛び出してゆきます。やる気満々です。外へ出るときよろきよろしながら、石段に腰掛けてはファイルに何か書きとめています。森や園庭を一緒に歩きながら、皆の中から次々と疑問が沸き起こります。「なんで葉っぱは生えてくるの(Sちゃん)」「なんで空は青いの(Kちゃん)」「なんで血は赤いの? なんで薔薇はとげがあるの? なんで太陽はまぶしいの? なんでお馬さんの足はあんな風に曲がっているの? お目めはどうしてこんな風になっているの…(S君)」目に映らないものまでが頭に渦巻き、溢れ出してくるようです。「これら好奇心の芽を、大切にしないで…」と、強い使命感を抱かせる初日のクラスでした。最後は皆で桜の花の蜜をたっぷり吸いました。

不屈のネギ

Cクラスでも写真を見せながら、ねぎの話を紹介しました(Aクラスの記事参照)。「…こんな風に花が咲きました。そして、折れてしまった根元の方だけれども、先生はそれを大事にとって水につけておきました。どうなったと思う?」皆黙り込んで考えます。「枯れた。」「腐ったと思う。」「ほかには?」「…分からない。」実物を見せると皆、驚きの様子。「何なんこれ!」「うわ、ねぎのにおいや!」僅か5cm程の折れたネギ、その側面の皮を突き破って、尖った黄緑の芽が出てきたのです。根も伸びています。

更に2週間後の教室。付き出た芽は10cm以上に成長し、青々として随分ねぎらしい姿になっていました。「え、これねぎ?」T君が匂いをかぎながらニヤリとします。「先生、噛ってみていい?」「そうだね、又はこのまま成長を見守ってみる? どっちにする?」と訊ねると、暫く悩んでいましたが、溢れる好奇心が勝り、とうとう先陣を切りました。「うわ! うまい!」そうなるともう止まりません。「ねぎの味や!」「からいー!」パクリパクリと4人が後に続き、たちまち青い部分は無くなってしまいました。

これをヒントにし、後日Sちゃんは水に浸けた人参のヘタを、F君(Aクラス)は大根のヘタを発芽させ(後におみそ汁に入れたそうです)、S君はミントの枝を発根させて、それぞれ持ってきてくれました。S君のミントは大人気で、惜しげも無く皆に葉を振る舞ってくれました。たとえ傷付いても活路を見出し続ける小さな「しぜん」。その秘めた力に感動できる心を皆さんに持ち続けて欲しいと願っています。なお、ねぎは第2の芽を伸ばし、今も健在です。

4月末のあるクラス—新緑をさがしに

いつものようにファイル片手に外へ飛び出すと、石段の脇に生えている筍を発見!たちまち5人に包囲されます。T君が抜こうとすると、すぽっと簡単に取れました。既に折られていたようです。SちゃんとT君が交互に皮を剥いて行きます。その勢いは、誰にも止める事ができません。「この中に『たけのこ』がはいってるはずや!」剥いても剥いても皮があり、辺りは筍の皮だらけになりました。「うわあ、毛が生えてる」「ごりらみたい!」「ひんやりしてる」「きれいな色」。3人が皮を観察します。隠れていた毛の生えていない部分は艶やかで、美しい薄紫のグラデーションをしています。「深い穴だなあ」「どのくらいかな」「なにかすんでいるのかな」木の枝を差し込んで、生えていた穴も覗き込みます。「やったー!」歓声と共に筍は丸裸に。とうとう、見たことのある乳白色の「たけのこ」の姿が現れました。皆で触っているうちに、先が折れてパカッと割れました。「あ、たけのこのいい匂いがする!」「ほんまや!」「くさいー!」剥き立てのたけのこを嬉しそうに高く掲げて、園庭へ駆け上がりました。

園庭では皆で新緑を観察したり、葉っぱの擦り絵をしたりしました。筍の皮の擦り絵を思いついたSちゃん、たくさんの細い筋が綺麗に浮かび上がりました。最後は園庭に遊びにきた猫を皆で触りました。後で分かったのですが、筍はBクラスのT君が後で観察しようと、折って穴に差ししておいた物でした。「ごめんね、知らずに、1年生の皆で観察させてもらったんだ。有難うね。」「いいよ。」とT君は爽やかな笑顔を返してくれました。これからも皆で仲良く、体に染み入る「しぜん体験」を共有してゆきたいと思います。



(文責 梁川健哲)

私は「しぜんB」と「しぜんD」クラスをこの春学期から担当させていただいています。

実は昨年度の育子先生のクラスでも、ツリーハウス作りやバウムクーヘン作りなどのときに子供たちにまぎれて参加させていただいていましたが、その時に印象的だったのは、子供たちのきらきらとした清新な感性と、そしてそのような感性を守り育てる育子先生のお姿でした。

今回「しぜん」クラスを担当するというご提案をいただいたときに、正直、とても迷いました。本当に私にできるだろうか、という不安からです。しかしある時から、そうした不安よりも、子供たちと一緒に過ごす時間はどんなに素敵だろう、そうした時間を共有したい、という思いの方が強くなってきました。また、なにもかもを私が教え込むわけではない、むしろ子供たちは自然から学ぶのであって、私にできることは、子供たちが自ら積極的に体験していくきっかけをきちんと準備しておくこと、そして子供たちの感性をどこまでも信じ守ることなのだろうと、思うようになりました。この一年間、私も子供たちと一緒に学び、センス・オブ・ワンダーを磨いていこうと思います。

しぜんB（火曜日クラス）

このクラスは、二年生のN o ちゃん、N a ちゃん、S 君、三年生のY 君、M ちゃんの、五人のクラスです。女の子三人は、昨年度からの引き続きで、男の子二人は、春学期から参加しています。彼／彼女たちは、とくに植物について非常に興味を持っていて、また実際に、よく知っている子もいました。

他のクラスもそうですが、このクラスも、昨年度まで育子先生のクラスで取り組んできた「しぜんにつき」を引き継いでいます。「しぜん」クラスは二週間に一度と、すこし間が空いてしまうので、その間に発見した自然に関することを、絵日記の要領でかくのです。それをいつもクラスのはじめに発表してもらいます。

N o ちゃんは、よく植物園やガーデンミュージアムに家族で行くらしく、そのときに見たお花のことをかいてくれることが多いです。植物園には普段目にするのが出来ないような珍しい植物もたくさんあり、それを見て驚き目を凝らしているN o ちゃんが想像できました。

N a ちゃんは、実際に植物を持ってきてくれたことがありました。そのときにはわからなかったのですが、後になってみんなで調べると、コバンソウという名前のイネ科の植物でした。変わったかたちの穂を、みんなが珍しがっていました。

S 君はいつも、山へ登ったり、道を歩いたりして見つけたものを「しぜんにつき」にかいてきてくれています。彼は普段から感性のアンテナを張りめぐらしています。四つ葉のクローバーを見つけたことをかいて、実際にそれを押し花にして持ってきてくれたときには、とても幸せな気持ちになりました。

Y 君はあるとき、小学校でオクラの種を触ったことをかいてきてくれました。彼が図を描いて説明したオクラの種は、普段料理の際によく見かける六角形に入ったものではなく、ちゃんと乾燥した表皮が分かれたところからできていました。種に入った筋まで、よく観察してくれていました。

M ちゃんは自分が見つけた植物や昆虫について、いつもしっかりと調べてきてくれています。字を書く欄が足りないときには絵の欄まで使って、それでも足りないときには二枚目も使って、続きを書いてくれることもあります。彼女の「しぜんにつき」には、自然への愛情が満ち溢れています。

「しぜんにつき」の発表やその後の対話の時間は、いつもとても充実しています。ここであまり時間をとりすぎると外で実際に自然に触れる時間が少なくなってしまうのですが、毎回のこうした取り組みの蓄積が、自然への興味を深めることになるのだと思います、大切にしています。

春はいのちがいっせいに芽吹きます。ある日は、「白い花を見つけよう」とテーマで、散策に出かけました。自宅から大きな植物図鑑を持ってきてくれている子も何人かいて、重そうにしながらも、花を見つけるたびに図鑑を開く姿は印象的でした。私も図鑑を持参して、みんなと一緒にページを繰ります。目の前に咲いている花をページの中に見つけて「あ！これや！」となったときは、みんな大喜びでした。

しかし屋外で図鑑のページをめくり続けるのは、なかなか忍耐の要ることもあります。いつも探し当てることができることも限りません。小さな図鑑だと、結局は載っていないこともあります。でも、あるときS 君が、図鑑ですっと調べてそれでも分からないときに、「先生、これ写真にとっておいてほしい」と言ってくれたことがありました。分からないものを放り出してしまうのではなく、あとから教室で調べようという気持ちを、嬉しく思いました。写真におさめたものは、必ず次の取り組みにつなげるようにしています。



子供たちには、小さな自然を発見する感性が備わっているようです。あちこちで同時に「先生、これ見て！」と声がかかるときもあります。Mちゃんは植物に特に詳しく、見落としがちで小さな美しいものの存在を、いつもみんなに教えてくれます。そのひとつひとつに驚き、感動できるような、そういう彼／彼女らの感性を、これからも大切にしていきたいと思っています。

(文責 高木 彬)

しぜん D (木曜日クラス)

このクラスは、二年生のKちゃんとY君、五年生のT君の、三人のクラスです。Y君は昨年度から引き続きの参加で、KちゃんとT君は春学期からの新参加です。みんな活発で行動力があり、どのような展開になるか、私も毎回わくわくしながら臨んでいます。

このクラスでも、時間の初めに「しぜんにつき」の発表を行っています。

Kちゃんは普段なにげなく気に留めた草花について、とても素直にかいてくれています。タンポポを見つけて「すごく色がこくて すごーくきれいでした」と発表してくれたときには、タンポポを心の底からきれいだと思ったのだらうなということがよく伝わってきました。

Y君も日頃から植物や虫によく親しんでいます。話をしているいつも真っ先に「ぼくもそれ知ってる！」と言ってくれます。Kちゃんが花ニラのことを発表した後も、「花ニラはほんとにニラのおいがするねんで！」と、自分の体験を楽しく話してくれました。

T君は、いつも感心させられるのですが、とても観察力があります。あるときは母の日に贈ったバラの蕾が開き始めてきたその時をとらえてかいてきてくれました。毎日眺めて待っていたのでしょう。またあるときは、アゲハチョウの幼虫の様子をよく観察していました。チョウの一生の図説もあります。

まだ始まって間もないからか、みんな「しぜんにつき」を発表するのが少し恥ずかしいようで、私が代わりに読むことがあるのですが、私が読んでいると、むしろその時の様子を文字に頼らずいきいきと話しだしてくれるということもあります。子供たちの自然への思い入れが、クラスを包み込む瞬間です。

このクラスでは、初回は自己紹介と森の散策をしました。ドングリが発芽しているのや、道の脇が白い砂で出来ていることを発見したときは、みんな驚いていました。散策の途中、T君が木登りを始めました。その木はしっかりと安全な木だったので、私が傍について、あとの二人も代わる代わる登りました。それが楽しかったのでしょう。誰からともなく、木にロープを引っ掛けてブランコにしたい、とリクエストしてくれました。確かにみんな木が好きそうです。これは肌で自然を体験する良いきっかけだと思い、それを採用しました。なので、初回はそのお約束だけして山を下りたのですが、二回目以降は、さっそくみんなで木のブランコ作りにチャレンジしてみることにしました。

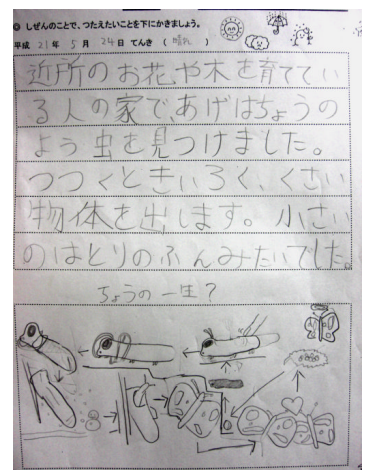
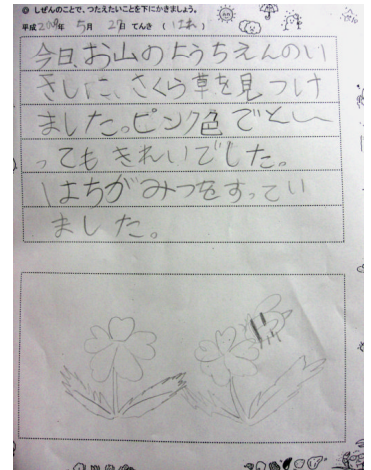
まずはブランコを吊るすことができそうな水平に近い枝振りの、安全で丈夫な木を探すところからはじめました。ひとしきり探してびったりの木を見つけたのですが、みんな偉いと思ったのは、木を見つけたときにすぐにブランコで遊ぼうとはせず、まずはどんな風にしてロープを吊るせば良いか、またロープを吊るすためにはほかにどのような準備が必要かということ、彼らなりにシミュレーションしてくれたことです。そこから、枝の真ん中の方(高さ2メートル弱くらい)にロープを吊るすためには、まずはそこまで木に登らなければいけないこと、でも毎回登るのは大変だし危ないから、枝分かれしているところに横木を架け渡して階段のようにすればいいことなどを考え出してくれました。

架け渡す横木の調達に出かけたときも、みんなとても団結していました。落ちていく枝しか使えないが、それでいて丈夫なものではなくてはならない。これはどうかな、じゃあこれは、というように、枝を吟味してくれました。朽ちた枝から軍隊アリがうじゃうじゃ出てきたときは、Y君とKちゃんが驚いて飛び退いていました。

この原稿を書いている時点では、調達してきた枝を実際に架けて階段をつくり、木から下りるための縄梯子も作り、そしてロープを吊るして少しブランコに乗りはじめたところ。だんだんと「森の秘密基地」が完成しつつあります。今後は、Kちゃんが提案してくれたハンモックにもチャレンジしていく予定です。

木々のふところに抱かれながら、夢中でひとつのものを完成させていった記憶が、彼／彼女らの感性の根っこの一筋となることを願っています。

(文責 高木 彬)



今年度から新しく開講した「かいが」クラス。低～高学年が一緒になって、同じ課題に取り組んでいます。

■ 「自己紹介の絵」

かいがクラスのはじめに「自己紹介の絵」と題し、皆の好きなもの、好きな事、夢や空想などを、自由に描いてもらいました。描き切れなかった分は宿題または次回のクラスで仕上げ、最後に発表会を行いました。



——Aクラスの様子

U君（5年）は図鑑を参考にオオワシの頭部を羽毛の一本一本まで丁寧に色鉛筆で描き込みます。今にも飛び立ちそうなメジロも描いてくれました。K君（5年）はタイトルつきで将来の夢を描いてくれました。未来の建築士が笑顔でこちらを覗いています。Rちゃん（5年）は、立ち姿の女性と色とりどりのお菓子や果物を描いています。パティシエかな？と思いきや、最後は眩い黄色のドレス姿となりました。

JちゃんとHちゃん（共に3年）は図鑑を参考にして、画用紙の隅に小さくうさぎを描き始めました。日を置いて完成したJちゃんの作品は遊園地に。隙間がないほど人や動物で賑わい、あちこちでハプニングが起きています（別の画用紙にお化け屋敷の絵も描いてくれました）。Hちゃん作品は一面の草原となり、色々な動物達がそれぞれの暮らしを営んでいる、ほのぼのとした気持ちにさせる絵です。

1年生の3人はどうでしょう。Nちゃんは、動物を描いては檻で囲んで行きます。Mちゃんは、教室の窓から見える竹林を見ながら竹を描き始めました。R君は、画用紙の裏側へまで続く迷路を描いてくれました。それぞれどのような絵に仕上がったかは写真を御覧ください。

——Bクラスの様子

画用紙を前に、一同暫しの沈黙。「ねえ、図鑑を見てもいい？」と尋ねたのは5年生。3人とも好きな動物を探して図鑑をめくります。M君は右下にハクトウワシを、T君は左端にブラジルキノボリヤマアラシを、Cちゃんは中央にカモノハシを描き始めます。Nちゃん（2年）は、大好きなゴマフアザラシ達と一緒に住む南極の家を空想し、Iちゃん（1年）は、地面に色とりどりの花を咲かせてゆきます。長い沈黙を破って勢いよくクレヨン而走らせ始めたのはKくん（1年）。大きな木にクワガタ虫が現れました。宿題で続きを仕上げた皆の絵は、御覧のようになりました。（写真は適宜、部分拡大させて頂きました。全ての作品をご紹介出来ないのが残念です。）

ここで幾つかの事に気づきます。（一概には言えませんが）、特に高学年に至るほど何かを見て描きたいと思う傾向があるようです。「絵が上手になりたい」と言う声も耳にしましたが、これはある対象を「生き写しにしたい」「獲得したい」という願望とも言ひ替える事が出来ず、極めて純粋な「絵画的欲求」であると感じます。

また、動物や昆虫などの生き物が皆にとって重要な題材であり、しかもそれらが写実に留まらず、時に空想や思い出と絡み合いながら「構成されている」事が分かります。何を描くかという選択も、いかに描くかという過程も様々です。

絵画には意図せずとも、描く者の性格や心が映し出される、というのは真実であると思います。どの絵にもさりげなく、そして確かに一人一人の世界観が滲み出ています。絵画のこうした「鏡」の様な作用はまた、他者の中に置かれることでその効果を増幅させます。それは、他者がかけてくれる「声」によるものです。たった独りで絵と向き合う時には気づかない事に気づかせてくれます。「友達の感性が多様であること」「自分の持ち味を友達が発見し、評価してくれること」、そうした繰り返しが、自信や信頼関係を築いていくに違いないと信じています。

今後、発表会では可能な限り時間を取って仲間の絵と向き合ってもらい、発言を待つようにしたいと思います。そこからどのように各々の世界が広がって行くのか、楽しみにしています。

■ 「木を描いてみよう」その1 ～室内にて

「さあ、今日はクイズのような取組みに挑戦してもらいます。『木』を描いて下さい。ただし、これを使って下さい。」
そう言って「赤・青・黄」の3色の絵具を示しました。

「え〜!」「先生、木なら何でもいいの?」「……」「先生、色を混ぜてもいいの?」「…ごめんね。先生は質問には答えられません。これが3つめのルールです。さあ、スタート!」「意地悪〜!」「冷た〜い!」

限られた絵具、目の前に無い木を、皆はどのように描くでしょうか…。

—A・Bクラスの様子

まず、大きめのバットに出した3色の絵具を色々に混ぜ合わせる作業から始まり、これが暫く続きました。一同が目指しているのは「茶色」のようです。中には、オレンジ色っぽくなり、苦戦している様子も見受けられました。「青」を使うという事は意外だったようです。

幹や枝の見当がついてくると、今度は「緑色」を探します。概ね「根元」から描き始め、「幹」、「枝」、最後に「葉」という順序で描く様子が見られました。おそらく無意識的と思われるが、どこか自然の摂理に従っているようで、面白い現象です。ただ、一つ一つの要素の描き方は、それぞれ個性的です。根元から塗り込んでいく人、幹の輪郭をとってから中を塗る人、枝や葉までも全体の輪郭線から描く人など、様々です。

1年生の中には立ち上がって描く様子も見受けられました。これは、画用紙の奥の方まで手を届かせるため自然に取った動作かもしれませんが、気持ちが乗っている表れのようにも感じられます。実際、画家の中には「立って描かないとじっくり来ない」という人もいるのです。

やがて、新しい展開が生まれてきます。「そうだ、歯ブラシ使ってみよう」と「僕、車も描こう」「ねえ先生、指つかってもいい?」聞こえるように宣言する声や、こちらの顔色を伺う眼差しはキラキラしています。断固として黙り続けるのも辛く、そんなときは彬先生も私も目配せで小さく頷きました。制約の中において自己の世界を広げようとする意志、よりよく表現したいという意欲。各々に悩み、考え、工夫してもらった事が狙いであったこの課題において、まさに期待していたものであり、期待以上のものでした。

葉を紅葉させた人もいました。後で聞くと、たまたま赤色が付いた事により、そうしようと決めたそうです。偶然も、大なる発想の源泉です。描く過程の中に、無数の「決断」や「発見」があることを、皆さんに少しでも感じてもらうのではないかと思います。

■ 「木を描いてみよう」その2 ～外へ

今回は外へ出て、想い通りに実際の木を探してもらいます。色々ある中で、「あ、何だかいいなあ」と思う木を、まず選んでもらうのです。「美の探求」のはじまりです。その際のポイントを先に伝えておきました。一つは木の「なりたち」、つまり根や幹、枝葉がどのような様子かに気をつけるということです。もうひとつは、「らしさ」が何であるか、つまり、選んだ木の特徴は何か、と考えることです。お山の坂道や園庭、森にも立派な木がたくさんありますが、あらゆる距離や角度から木を眺められるという利点から「上終公園」へでかけました。「え? 公園!? ねえ、木登ってもいい? 遊んでもいい??」皆の目が輝きだしました。

公園に到着すると、まずは紙も鉛筆も持たず、描きたい木探しに専念してもらいます。公園に来てわくわくする気持ちを堪えきれず、滑り台を駆け上がったたり、ブランコをこいだりしながらの木探し開始です。どの木を描くか心があたたまったところで、次はいよいよ画板を持って木に挑みます。その際、どの視点から描くか、どのように画用紙に収めたいかを考えてもらいました。



勢いよく手の平でこする



指先につまんだ「木」



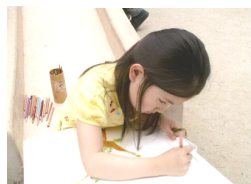
「トトロも描きたい」



「どんな風に描こうかな」



「少し小さいけどあの木がかわいいと思うから」



両手に色鉛筆をにぎりしめ

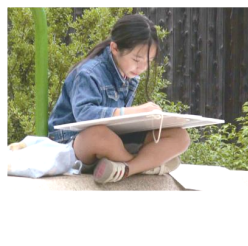
「先生、これって『しぜん(クラス)』じゃない?(Nちゃん)」



お友達に囲まれます



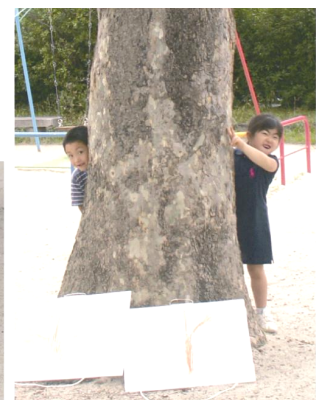
真下から見上げつつ



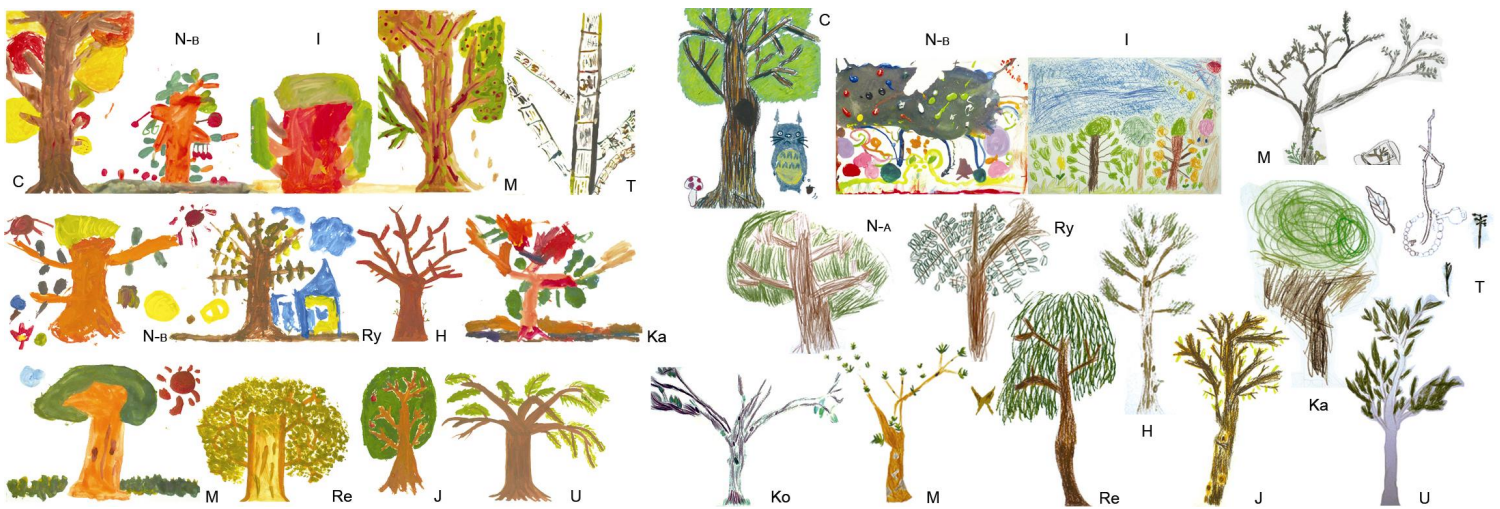
高いところから、高い木を眺めて



遠くから全体を眺めて



「できたー!!!」



内と外においての2回に渡る木の課題でしたが、前者は言わば、内なる木、心の木と言えるでしょう。そして、後者は実物の木と向き合い、木の成り立ちや質感に迫った、より木らしい木であると、一応は言うことができます。しかしどうでしょうか。これまでの過程を御覧になった方の中には、「前者の木は実物を見ていないから出鱈目だ」「後者の木は写実に夢中になり、気持ちが入っていない」などと言う人はいないはずですが、どちらの木も、各々が導き出した立派な解答であり、それぞれの良さを持ちます。それらは、無数に有り得た正解の中の一つの「正解」です。そして、如何に描かれようとも、心を伝わって表現された2つの木は、どちらも等しく「心の木」なのです。

今回の課題には、絵画を通して学び得る事、伝えたい事のあらゆる要素が盛り込まれています。しかし、たった一度の取組みで、それら全てが伝わるとは到底考えておりません。これから伸び伸びと、色々な制作に取り組んで頂く中で、一人一人が「見出して」いって欲しいと願っています。その時に又、ふと、意地悪なクイズと上終公園の体験を思い出してくれたら嬉しく思います。

(文責 梁川健哲)

・描くということ

いつか個人的にお話しをさせていただいているときに、健哲先生が、「デッサンは、モチーフを上手に描くためにあるのではなく、モチーフのかたちの仕組みを頭のなかに蓄えていくためにある」という主旨のことをおっしゃいました。また、「絵画で大切なのは、完成した絵の出来の善し悪しというより、キャンバスに向き合った時間だ」というような言葉も書いておられました。

思い起こせば私は、幼稚園から小学校にかけて、迷路を描くのが好きで好きで、時間さえあればひたすら線を追い続けていたような記憶があります。幼稚園の時、周りが何をしようがおかまいなしに迷路を描き続けている私を見た当時の先生が、ある日、「今日はみんなと、あきらくんといっしょに迷路をかきましょう」と言って教室の床全面に模造紙を敷きつめてくれたことがありました。私の迷路に、みんなが迷路を繋げてくれました。いつも一人で描き続けていた迷路の道が、友達の迷路へと初めて繋がったのです。その日を境に私には、隣りで一緒に迷路を描いてくれる一人の友人ができました。いくら私が周囲を気にしないとは言っても、その時は本当に嬉しかったのを、今でも鮮明に覚えています。

迷路を描くということそれ自体は中学校に入るとやめてしまいましたが、その迷路を描く時間は、形を変えて私の中に息づいているように感じます。いま私は大学院で研究をしていますが、やっていることは本質的には当時と変わらない気がします。道の先を作り、追いつけることが、現在の私という人間を根っこから支えています。それは、あの頃、協調性のない私をすぐに否定せずに温かく見守り、その迷路の先を他者に開くことをそっと教えてくれた、ばら組のにながわ先生とやま組のもりた先生のお陰だと、心からそう思っています。

だから、健哲先生から絵画とは完成作品のことである以上に真剣な時間のことだとお聞きしたときすぐに、それは私にとっては迷路だと思い、当時の先生のお顔を思い出し、また自分自身の迷路を改めて肯定して下さったようにすら感じたのです。

私は絵画の技法については殆ど何も知りません。健哲先生とは違って全くの素人です。しかし、描く事の楽しさ、描き続ける事の大切さについては、少なからず身に覚えがあります。私がにながわ先生やもりた先生のようにできるかと問われると、自信をもってできるなどとはとても言えませんが、それでも今度は私が子供たちに寄り添い、子供たちの感性を守り育てる事で、少しでもあの時の恩返しができるという思いは、いつも持ち続けているつもりです。

長々と私事を述べたててしまいました。これは勿論、これまでの子供達の作品やクラスの様子については既に健哲先生が書かれた素晴らしい文章があるからです。彼らの個々の感性を認めつつ「こんなこともできるよ」と提示し、また、皆で集まって取り組む事の大切さをそっと指し示しながら、彼らの創作の場を守っていきたく思います。

(文責 高木 彬)

『ことば』 1年生A・B 担当 福西亮馬

このクラスでは、前半は、幼稚園の頃になじみのある俳句の暗唱や「しりとり」「なぞなぞ」といった言葉遊びを通じて、生徒たちから出てくる言葉を大事に聞いています。そして後半は、じかに言葉の栄養が染み込みやすい素話や絵本を読んでいます。

基本的にA、Bクラスとも同じ内容を平行して取り組んでいますが、生徒たちの顔ぶれによって興味が異なる場合は、それぞれの興味により近づけるように内容を工夫しています。

Aクラスでは「しりとりマラソン」が好評です。「もっとしたい!」という生徒たちの希望を酌んで、これまで3回続いています。この「しりとりマラソン」は、「り」と言えば「り」のつく単語の候補を、生徒たちの中から一斉に出し合ってもらい、それをホワイトボードに私が書き出していき、という方法でしています。そして一通り単語が出揃ったら、みんなに手をあげてもらって一つに絞ります。「『りんご』がいいと思う人?」「『りす』が…」とたずねる最中、生徒たちが互いに顔を見合わせながら、「しーん」となるのが愉快です。単語が決まったらそれを書き写して、次に進みます。1単語1km というルールで、今は42kmの半分地点まで来ました。

一方のBクラスでは、「素話」に興味があるようです。内容は最初Aクラスと同じ昔話を考えていたのですが、最終的には生徒たちに一番興味のある虫の話題を取り上げることにしました。ミツバチから始まって、アリ、アリジゴク、テントウムシ、ホタルと今では続いています。

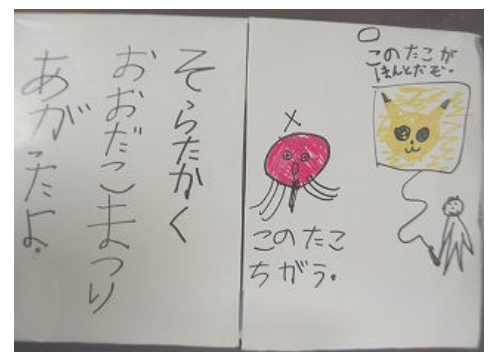
その中で一番人気は、オーソドックスなアリでした。この日はアリをつかまえてきて絵を描いてもらい、その後で『ありのちえちゃんのおつかい』という絵本を読みました。この絵本では、ちえちゃんという働きアリが、アブラムシに蜜をもらいに行くことと、死んだ虫を持ち帰るといふ、二つのおつかいを頼まれます。その一つ目のところで終わって来週また読もうとすると、「えー、もっと読んでよ!」と催促する生徒が現れました。また、アリとアブラムシの関係のことをジェスチャーを交えて説明したことを覚えていて、「アブラムシってな、アリがおなかをこんこんってすると、ちゅーっと蜜を出すんやろ?」と、興味深く繰り返す生徒もいました。

一方Aクラスの素話では、昔話をしています。「聞き耳頭巾」「食わず女房」といった有名なものから、時には「とかげの目貫」といったあまり知られていない話もわざと取り混ぜつつ、新しい筋に対する興味を掻き立てることを目指しています。

ところで、「目貫」という、あまり聞きなれない単語が出てきましたが、それが一体どういうものかを、一緒になってイメージできる点も、クラスとしてのメリットです。ちなみに目貫というのは、刀の柄にはめ込んで、柄を握りやすくする彫り物のことだそうです。それを色々な動物の形に彫って、「どうだ見てみろ。おれの目貫を。立派な虎の目貫だぞ」「何を。おれなんか虎より強い、竜だぞ」といったふうに自慢することが侍同士で流行したそうですが、こうした心情は、ポケモンやカードゲームを大好きな小学生たちにとっても近いものではないでしょうか。こうしたイメージの膨らみもまた、クラスで共有していきたいと考えています。

俳句については、今学期は暗唱だけに留めましたが、家で頑張ってくれてくれた生徒もいました。これはBクラスの生徒です。一生懸命書いた字が、何とも言えず貴重に思われたので、それをここに紹介させていただいてから、筆をおきたいと思います。

- ・きゅうしょくは おいしいごはん できたよ
- ・シェリーはね おやつたべすぎ ふとりすぎ
- ・さくらぶえ りょうませんせい ならったよ
- ・さくらはね くちでふいたら おもしろい
- ・たたみより おおきいたこが あがったよ
- ・そらたかく おおだこまつり あがったよ
- ・はいくはね おもしろいこと かけるのさ



(文責 福西亮馬)

はるのはいく

はるの町 あるくとはなが いっぱいだ さくらはね sdaleになれば トンネルだ
 はるになり けしきもかわり さくらさく さくらちり ながれながれて さくら川

これは A ちゃんが授業以外でも作ってきてくれた俳句です。「哲学の道」を歩きながら、思い浮かんだのだそうです。私が何も言わなくてもこうして自分から取り組んでくれたことを大変うれしく思ったので、ここに紹介しました。

さてこのクラスでは俳句と平行して、素話にも力を入れています。今学期は、ギリシア神話の「振り返ってはならない」という話を皮切りにしました。豎琴の名人オルペウスが、死んだ妻のエウリュディケをあの世界まで連れ戻しに行き、出口の前で振り返ってしまう（ハデスとの約束を破ってしまう）という話です。これにはいくつかのバリエーションがあるようですが、オルペウスが彼女の安否を気遣って思わず振り返ってしまったことは、オルペウスがあの世界にたどり着くことができたことと、実は同じ愛が根であるように思います。物の本によればこの話の前置きには、エウリュディケの死の原因を作ったアリスタエウスという養蜂の神がいて、その神が大事に飼っていた蜜蜂の突然の全滅が語られています。ただ最後にはアリスタエウスのもとに、死の原因を知り技術を駆使した結果、新しい蜜蜂の群が戻ってくるのですが、オルペウスの妻という「個」にはそれができなかったという点で、いっそう皮肉です。そのように、取り返しのきくものとそうでないもの、というあたりに力を込めて、私が知っている内容を語りました。

また次には、ゼウスとポセイドンとハデスという神が、それぞれくじで天と海と地下の支配権を手に入れるという話をしました。面白いことに、ゼウスとポセイドンには「かっこいい！」と、それなりの男子の人気が集まる一方で、あの世界の王のハデスには「怖い」の一言。ハデスは、地下に隠された財宝の主でもあるのですが、女の子からは「えー、それでも（あの世界に）閉じ込められるのはいや」（笑）とこれまた不人気。みんなの嫌がる暗い地下で一生懸命仕事をしているのに、報われない神様もいたものですが…。またこれは男子の好みそうな蘊蓄で、ゼウスは「雷電」、ポセイドンは「三叉の槍」を持っています。それに対し、ハデスはというと「隠れ帽子」です。「えー？ 帽子い？」と、これも人気のない要素の一つでした（実はこの「隠れる」というのが重要なハデスの神意なのですが…）。

一方で、「ハデスって、オルペウスの話に出てきたのと同じ神様？」と関連性に気付いてくれたり、「鉄腕アトムにプルート（ハデスの別名）というロボットが出てくるよ。でもボラーにやられて最期に自爆したんや」とか、「セーラームーンにもジュピター（ゼウスの別名）っていたよ」と教えてくれる生徒たちもいました。また絵を見ながら「これがゼウス？ じゃあ、こっちがポセイドン？」と、初めて入ってくる知識に興味津々な様子でした。

去年から続けている「推理クイズ」もまた、なかなか衰えない人気です。B君が自分で考えてきてくれた問題がありますので、ぜひみなさんも一度お考えください。

問題（出題者 B 君）

ゴンタとゆう（いう）子が、ラーメン屋に行き、一杯四百円のラーメンを食べました。そして千円払ったところ、二百円のおつりが返ってきました。それはなぜでしょう？

「ゴンタは2杯食べましたか？」—いいえ。「1杯だけでしたか？」—はい。

「前の日のツケが残っていませんか？」—いいえ。

「誰かゴンタとほかに一緒にいましたか？」—はい。「それはお父さんお母さんですか？」—いいえ。

「それは友達ですか？」—はい。でも、なんという名前でしょう？

「え？ 名前も分かるの？」—はい、ちゃんと分かります。

「それは、男子の名前ですか？」—いいえ。女の子です。

この問題を口頭で出された私は、文中に隠されたその「女の子の名前」に全く気付きませんでした。そして答がわかった時は、B君に感心しました。その調子で、秋学期からもますますバージョンアップしていきましょう。

（文責 福西亮馬）

『ことば』 3～5年生

担当 高木 ^{あきら} 彬

物語といえば、たいていは読むものです。社会には、いささか過剰ともいえる数の既成の物語が溢れていて、それを次々と消費していくことが日常です。小学校の国語の授業でも、物語の読解にはかなりの時間が割かれています。もちろんこちらには、優れた物語に触れることで、まず言葉の基本を習得するという目的があります。でもそれにしても、一方で、物語を“作る”機会が、極端に少ないように感じます。時間がかかる、採点ができないなど、その理由はいろいろとあるのでしょうか。しかし物語を作ることの大切さに変わりはありません。

なぜ物語作りが大切なのでしょう。それは、じっくりと想像する力を養うためです。また、自分が想像したものを、相手に伝える力を養うためです。そして、根本的には、そうして相手に伝えることによって、自分という存在を認めるためです。

このクラスでは、楽しく物語作りに取り組んでいます。福西先生から引き継ぎました。昨年度から受講されているKちゃん、Jちゃん、Rちゃん、Aちゃんに加え、今年からY君が新しく参加されています。毎週折りをみて絵本を読んで、想像の種を蓄えながら、積極的に物語作りに打ち込んでいます。

福西先生からお聞きしていた通り、彼女たちの創作にかける情熱には格別のものがあります。新参加のY君も劣らず熱心に、楽しい物語を書いてくれています。それぞれの物語の内容については、まだ全員が完成作を持っているわけではないので、ここで一列に公開することは今のところ控えておきますが、どれも楽しく独創的な物語ばかりです。

どこまでも想像の翼を広げていってくださることを願っています。

(文責 高木 彬)

『ことば』 4・5年生

担当 福西亮馬

さっちゃんは四才。さっちゃんは『花くらようち園』に行っています。さっちゃんは年中でさくら組さんです。

ある日、さっちゃんのお姉ちゃんが習い事をはじめました。さっちゃんはそのときは、「ふうん。」

と思っていましたが、さくら組で大親友のれみちゃんに、

「今日いっしょに遊ぼう。」

と言うと、れみちゃんが、

「わたしね、バレエを習いはじめたの。それで今日バレエがあるから遊べないの。ごめんね。」

といったのでさっちゃんは、がっかりしました。

これは、Aちゃん(4年生)が書いてくれた『さっちゃんのすてきなすてきな習い事』というお話の冒頭です。これだけ短い間にも『そのときは、「ふうん。」と思っていましたが……がっかりしました。』と、主人公の心の襞が的確に描かれていて、見事です。この後の展開も、作者自身の習い事をしている経験を活かして、上手にフィクションへと昇華させており、大変によく書けていると思いました。

さて次は、Hi君(5年生)の『未確認動物～本当にいるか?』という作品(レポート)の冒頭です。

未確認動物をしょうかいします。

ネッシー

場所スコットランド、体長6m。565年にネス湖をおとずれた、セントコロンビアという人が、ネッシーを一番最初に発見したといわれています。その後、多くの写真や映ぞうなどがとられました。ネッシーは本当にいるとうわさが流れましたが、1994年、ネッシーはつくり物だったというニュースが流れました。しかし、現地では、今もネッシーがいると信じられています。

さすがは5年生で、落ち着いたのある文体だと思います。Hi君はほかにも十種類以上もの未確認動物について報告してくれました。本当はもっともっと知っているそうです。これはまた別のものを書いている時の話ですが、朝早く起き出しておもむろに机に向かっているHi君の姿を見て、お母さんが驚いたそうです。次回作もぜひ期待しています。

このように「作文」の取り組みでは、直接原稿用紙を配る日もありますが、今は長い文章を書くための準備段階として、「俳句作り」や「辞典作り」をしています。中でも「辞典作り」は新しい取り組みで、物事を短い言葉で書き表すというものです。たとえば、「ノート…大事なことを書くもの」(Mちゃん)、「赤ちゃん…ほっぺが赤い」(Aちゃん)など。それを五七五で書けば川柳になりますし、たとえば「かたつむりにゆるにゆるしてて かわいいな」「ほたるはね なつに出てくる いきものだ」「あまの川 どんどんながれ とおくへと」(Mちゃん)とすれば、それはもう俳句です。「俳句はね 思ったことを書けばいい」というのは、H君の言葉ですが、このようにどんどんと思いついたことを書いてくれることが、長いセンテンスを書く練習にもつながります。特にMちゃんはこの辞典作りを気に入ってくれた様子で、次々と単語を増やしていました。

そして慣れてきたところで、私の方から「お題」を出すようにしました。たとえば上のMちゃんの俳句にあるように、この間は「雨、ホテル、天の川」でした。それについてイメージすることを、制限時間内(1つの単語につき3分間がいいところ)で書いてもらうようにした結果、この方がむしろゲーム性があって乗りやすいようでした。そのようにして単語がたまっていた紙を、ホッチキスで留めていくと、「自分語」で意味の書かれた辞典のでき上がりです。それを開くと、ちょっと鼻高な気分になれそうです。書くという行為は、そもそも放っておくといつか消えてしまう思い付きを大事にしよう(あるいは伝えたい)という気持ちから出てくるものです。それを繰り返していくうちに、前に書いた単語が結びついてイメージが膨らんだり、もっと書きたいことが見つかったりして、文章の長さも次第に伸びていくだろうと期待しています。

またEちゃんは「推理クイズ」を楽しみにしてくれています。以前「逆走のなぞ」(このページの下にある問題)を出した時は、自然とみんながEちゃんのことをリーダーに認めるほどの乗りでした。そしてEちゃんの「道がUの字に続いていたから、白バイの人から見れば先を進んでいるトラックが逆送しているように見えたから」という見解を、答の一つに採用したところ、何とも言えず喜んでくれました。早速Eちゃんはその日、他のクラスの友達にも同じ問題を出していたようです。

最後に特筆すべきことは、「本読み」です。このクラスは音読が得意です。普通グループで読む時は、誰か一人でもよそ見をしていて、「え、今どこ？」となって棒読みをしてしまうと、一気に白けてしまうものです。しかしそうならないように、どの生徒も心を込めて読んでくれるので、まるで小さなお話クラブにいるかのようです。特にEちゃんとMちゃんが何とも言えない、小さな子に読み聞かせてあげるようなゆったりとした抑揚をつけてくれることには感心します。もちろんAちゃんもHi君にも真面目な上手さがあります。みんなで一つの話の輪を紡いでくれているように感じます。このまま本が好きになってもらえるように応援していきたいです。

ちなみにテキストは『星モグラ サンジの伝説』(岡田淳・作/理論社)を扱っています。岡田淳は、私が小学生の頃に長編物語の楽しみを初めて知った『二分間の冒険』という作品の作家で、みんなもきっと興味を抱いてくれるものと思います。最後までお付き合いしてもらえると嬉しいです。



(文責 福西亮馬)

～推理クイズ～ 『逆走のなぞ』

問題 白バイの警官の目の前で、トラックの運転手が一方通行の道を逆走していきました。それなのに白バイの警官は追いかけて取りしまりませんでした。なぜでしょう？

「警官は、お金をもらっていましたか？」—いいえ。

「警官は、本当に見ていましたか？」—はい。

「トラックの運転手は、本当に悪いことをしましたか？」—いいえ。それがしていないんです。

「一方通行の道路標識が間違っているのですか？」—いいえ。

「運転手は別に悪いことをしていなかったから、警官がつかまえなかったのですか？」—その通りです。

「トラックは重要ですか？」—いいえ。ダンプカーでも、家用車でも、〇〇でもいいです。

「トラックの運転手は、本当にそれ(トラック)に乗っていましたか？」—いいえ、いいえ、ええ！

『ことば』 5年生

担当 高木 ^{あきら} 彬

前年度から持ち上がりのこのクラスは、これまでのM君とT君に加え、新しくY君とH君が仲間入りし、より充実した学びの場となっています。

春学期は、前年度の「ひみつ道具作り」や漢字の取り組みを引き継ぎつつ、少し長めの物語『オズの魔法使い』を新しく読み始めています。クラスの持ち時間を30分ずつ前半と後半に分けて、毎回前半は物語を読む時間に、後半は漢字やひみつ道具作りの時間に充てています。物語を読んでいくコンスタントな取り組みと、新しい道具や漢字を発見していく動的な取り組みとが、お互いに支え合うような、バランスのとれたクラスを心がけています。

前年度の後半は、アンデルセンの『絵のない絵本』を読んでいましたが、毎回読み切りのようなかたちだったからか、途中でストップしてしまい、そのままになっていました。そうした反省から、今年は、次の展開が楽しみになるような、そういう物語をと思い、『オズの魔法使い』を選びました。

順番に一ページずつ輪読しているのですが、みんな熱心に朗読してくれています。途中で読むのにつまずくと、助ける小さな声が誰からともなく聞こえてきます。教室はほどよい緊張感に包まれています。いまこの文章を書いている時点では、物語も佳境に入り、オズ大王に会って西の悪い魔女を倒すところです。「はやく読みたい!」、「読み終わったら、この続きを書きたい!」などと言ってくれるのは嬉しいことです。

また、折りをみて、自分が朗読したページの書き取りもしてもらっています。最初から担当がバラバラなので速さを競っても仕方がないことを伝えると、原稿用紙にそれぞれ丁寧に字を書けてくれます。時間が来ても「あともうちょっと、この段落まで」と言って書き上げてくれるところには、「ここは自分の担当」という彼らの意識の高さが窺えます。

クラスの後半は、今のところ、「ひみつ道具作り」と漢字にほぼ隔週のペースで取り組んでいます。「ひみつ道具作り」は、ドラえものの道具の要領で、自分で発明した道具の絵を描き、それに説明文を付けるものです。春学期から始めたH君とY君も、すぐに要領をつかんで、それぞれ独創的な道具を作ってくれています。詳しくは前号の「山びこ通信」、または山の学校weblogの記事をご覧くださいと思います。

漢字の取り組みは、前年度では通年にわたってその成り立ちを学んできましたが、春学期からは熟字訓を学んでいます。ご存知の通り、二字以上の漢字が一つの意味を表すものを「熟語」というように、「熟字訓」とは、その漢字の組み合わせでしか成り立たない訓読みのことをいいます。たとえば「陽」は「かげ」とも、「炎」は「ろう」とも読みませんが、セットになると「陽炎(かげろう)」です。

熟字訓を学ぶさいの基本的な考え方は、要素の組み合わせからその熟語(漢字)の意味を探るという姿勢において、前年度で学んできた成り立ちと、ほとんど変わりありません。この熟字訓の取り組みで面白く感じているのは、一般的な正答にいたるまでの、生徒たちの解釈の豊かさです。あるときは「陽炎」を「たきび」(太陽のような炎)や「ゆうやけ」(炎のような太陽)と読んでくれたり、またあるときは「白雨(ゆうだち)」を「ゆき」と読んでくれたりしました。これからも、こうした彼らの感性の閃きを大切にしたいです。

(文責 高木 彬)

『ことば』 6年生

担当 高木 ^{あきら} 彬

「ことば6年生」は、前年度から引き続き担当させていただいている、主に作文に取り組むクラスです。作文で大切なのは、書く技術の習熟と同時に、書く内容を練り上げていく時間です。そのためにこのクラスでは、作文技術はもとより、実際に書き始めるまでの対話を重視してきました。前年度はU君と二人だったこのクラスは、春学期からT君がその対話に加わってくれたことで、いっそう豊かな学びの場になりつつあります。

対話をするということは、自分の考えと相手の考えを平坦に均すことではなくて、相手の意見を

尊重しつつ、そこから刺激をうけ、自分の考えを高めることだと、私は思っています。たとえば谷川俊太郎の「朝のリレー」という詩を読んだときは、事前に別の詩で予行演習を行ったうえで、何の説明もせず先入観のないままに、まずは初読の感想をそれぞれ原稿用紙に書き、そして出来た感想文をそれぞれに発表してもらいました。面白かったのは、同じ詩をまったく別の視点から捉えてくれていたことです。一人が発表している間に、もう一人が「そうか」とか、「おお、なるほど」とか言うてうなずいているのが印象的でした。そして今度はそれを互評しました。最初は口頭で、次いで実際に原稿用紙を交換して、面白いと思ったところ、疑問に思ったところなど、私も含めて三人で、なんでも言い合い、朱で書き込み合いました（この時点で、私の方から技術的な手引きもします）。かなり密度の濃い時間を過ごしているという感覚がありました。以下は、こうした取り組みを経て完成させてくれた感想文の抜粋です。

朝のリレーの感想

T

ぼくは、「朝のリレー」を読んでなんでリレーなんだと思いました。でも、読んでいくと、カムチャッカの若者がキリンの夢を見ているとき、つまりねている時、メキシコの娘は朝が始まって、というようにどこかでつかれてねる時、どこかの人は起きて長い一日が始まろうとしているということがわかりました。

ぼくが、ぎもんに思った文章は、「そうしていれば交替で地球を守る」というところで、だれから守っているのかなあというのがぎもんでした。

いいなと思った文は、「どこか遠くで目覚時計のベルが鳴ってる」です。なぜかという、ぼくがねる時、この詩を思い出すと、ほんとうに鳴ってるような気持ちになるからです。

みんなも、この詩があることを知ってほしいです。

朝のリレーを読んで

U

もし、ぼくが谷川俊太郎だって「朝のリレー」という題名で、詩を作ったとしたら、ぼくを詩の中に出演させていたと思います。例えば、
「エジプトの青年が目覚し時計を止めて、／インドの少女にバトンをわたし、
インドの少女があくびをしながら、／中国の赤んぼうにバトンをわたす。
中国の赤んぼうは泣き声をあげて、／こんどはぼくにバトンをわたす。
ぼくは喜んでバトンをもらおう。／世界中の生き物がこのバトンを一日一回つかんでいる。」

という感じで書いていたと思います。

ぼくは、この「ぼく」を出演させることで、「ぼく」が受け取ったバトンを次は読者にわたすのだよ、ということを想像してほしいと思いました。また、「ぼく」は世界中の生き物の一員でみんなも一員だよ、ということを想像してほしいと思いました。

ぼくは谷川俊太郎が言いたかったことを考えてみました。たぶん谷川俊太郎は、朝というのは一日の始まりで、全世界の人が同じ太陽で起きる、つまりつながっていることなので、「みんなつながっているのだよ。」と、言いたかったと思います。なので十三行目の「地球を守る」ということは、つながりを守る、ということだと思います。この詩をうまくまとめられる谷川俊太郎はすごいと思います。

(文責 高木 彬)

四月から始まった「かず1年B」では、男の子5人、女の子5人の二組にわかれて私と福西先生とがそれぞれを交替で受け持つ形をとっています。「できた!」というこどもたちの喜びを大事にし、そうすることで頑張る力を育むクラスづくりを心掛けております。こどもたちは、私の受け持ちの回では「迷路」「点つなぎ」「間違い探し」などに取り組んでいます。

迷路は、まずはスタートからゴールまでたどり着くというシンプルなものからはじめています。春学期に取り組んだ迷路は、行き止まりにあたって、まだ行っていない道を進めば必ずゴールにたどり着けるものなので、簡単なものだと、みんなどんどん進んでいきます。少し難しいものでは「わからん、先生もう教えて!」と投げ出しそうになる子もいますが、辛抱強く道を探せば自力でゴールできると励まして、頑張ってもらいます。苦勞しながらゴールまでたどり着いたときの喜びは大きいようで、それはこちらにも伝わってきます。こうした喜びの積み重ねは、これから出てくる難しい問題に取り組むときに立ち向かう＜原動力＞になるのではないかと思います。

迷路に関しては、解くだけではなく、作ることもしています。実は作る方が大変で、迷路らしい迷路にするのはなかなか難しいものです。今はまだ、形になりませんが、その作業の途中でみんな色々考えて工夫して色々考えることは、それ自体重要な事だと思います。こどもたちは、落とし穴をつくったり、にせもののスタートやゴールを作ったり、色々な工夫をこらしています。こうした中でこどもたちは考える喜びを覚え、考える力もついてくるのだと思います。

迷路の他には、点つなぎや間違い探しをしています。点つなぎは無理なく数に親しむにはもってこいで、1から順に数をたどると絵になるというものです。出来た絵には、名前をつけてもらっていますが、名前の付け方もそれぞれで、見ているこちらにも楽しませてもらっています。間違い探しは、二つの絵の違う部分を見つけ出すシンプルなものですが、形の違い、向きの違いから微妙な大きさの違いまであって、探し出すにはそれなりに根気が必要です。点つなぎのようにどんどん進んでいけるものとは違って、じっくり目を凝らさないとはいけません。見つけるまでは一苦勞ですが、見つかるみんな嬉しそうです。

こうした取り組みの中で、みんな少しずつ成長をみせています。かずの数え方や線の引き方などでは、はじめより安定感があるように思います。また、迷路でも、詰まったらゴールから逆算して道を探すといったコツをいつの間にか身につけていたりします。「かず」以外の部分でも、みんな四月から様々なことに触れ、学び、短い間にも少しずつ成長しているのではないのでしょうか。私は、この春がはじめての受け持ちで、「山の学校」は私にとっても新しい環境だったのですが、こどもたちと関わる中で色々教えられることがありました。「喜び」もいっぱいありました。みんながこれからも喜びとともに「かず」に親しみ、学んでくれること願っています。

(文責 小林哲也)

・「考える楽しみ」を持ち続けるために

このクラスでは、「かず」と言う時には広い意味で「考えること」を指しています。その意味で今学期は「迷路」「点つなぎ」「サイコロ作り」「すごろく」に挑戦しました。おそらくどれも1年生にとっては新しい刺激だったのではないかと想像します。

このうち「迷路」はだいたい毎週取り入れて、生徒たちもそれを楽しみにしています。「スタートからゴールまで線を引く」というだけで単純に見えますが、これが意外と1年生にとっては当たり前ではありません。最初の頃は、行き当たりばったりで、時々コースを外れてしまう(壁をすり抜ける)こともしばしばでした。しかし今ではそれも減ってきて、別れ道にさしかかると、少し鉛筆を止めて「先を読む」姿が見られるようになってきました。彼らのじっと考える目は、凜々しさそのものです。これからもそうした考える意欲を大事に見守っていきたいと思います。

さて、ここからは少し抽象的な話になります。数というと普通、「りんごが5個あります」と言う時と、「それは前から5番目のりんごです」と言う時の「5」では意味が異なるわけですが、それらを一つの記号で扱うところに、まさしく算数らしい「抽象化」との出会いが潜んでいます。言いかえると、「5個」と「5番目」をシンプルに「5」で置きかえるということは、1年生にとって最初の大きなステップであるとも言えます。このステップをしかし、単純な一段と思わずに(すでに登り終えた大人にはそう思えますが)、できる限り小刻みにして何段にもじっくりと楽しい気持ちで登れる階段にすることが、今の時期にはふさわしいことだと考えています。そこで今は、「点つなぎ」などの教材で1、2、3…と数字そのものに慣れてもらう一方で、サイコロの目やすごろくのマス順番といった具体的な感覚と結びついてもらえることを狙っています。



数の的当てゲーム

(Aクラスの取り組み。絵の的の場合は、裏に数字を書いて隠してあります。100など、大きな数への自然な興味を感じさせます)

また、すごろくで6と5の目が出たりすると、 $6 + 5$ (繰り上がり) を計算するきっかけになります。ただしそれは一通りではなく、「6進んでから5進む」という方法もあります。そのように考え方が複数あることには、いつでも安心できるものです。「迷路」でも時々、「こうも行けるけれど、こうも行ける!」ということを発見する生徒がいますが、その声はいつも生き生きとしています。自分のやり方を認めてもらうことは、自分自身をも認めてもらうチャンスなのでしょう。

それなのでこのクラスでは、一つの課題にみんなで取り組んでもらいながらも、一方では自分にあったやり方をそれぞれに持ち寄ってでも参加できるような仕掛けをしていこうと考えています。そしていつかその時に楽しいと思ってもらえた経験を、そっくりそのまま「算数ってこんなイメージだよ」という勝ち癖として持ち続け、その先に進んでもらえることを願っています。

(文責 福西亮馬)

『かず』 2年生 担当 浅野直樹・岸本^{こうた}廣大

パズル——数学の問題も同じでしょうが——には解けたときの喜びがあります。偶然解けてもそれはそれでうれしいものですが、論理に従って解けたときの爽快感はたまりません。簡単なものならいざ知らず、難しいパズルは偶然だけによって解けることはめったにないということもあります。そこでこのクラスでは論理的に考えることを伝えることを目標としていました。と申しましても大げさなことではなく、パズルを解くときのコツのようなものです。

例えばナンバープレイス(図1参照)では、始めは当てずっぽうで解いていた生徒たちも、少しずつコツをつかんできました。「(図1のアのマスに着目して)横の列に1、2、5、6があり、縦の列に4があるから、このマスには3が入るしかない」とそのコツを披露してくれた人もいます。また、同じ数字同士を線が交わらないように結ぶパズル(図2参照)では、「角のマスを(先に)通るように考えるとできる」と教えてくれた人がいました。論理パズル(図3参照)はその名の通り論理を必要とします。特に意識していなくても、問題が解けたということは論理を使っています。この問題をしたときには一人一人なぜその結論になったかを説明してもらいました。数学的な厳密さはともかくとして、それぞれに論理があり、それを苦労して言葉にしてくれました。こうした経験はより難しい問題に挑戦するとき生きてきます。また、いわゆる普通のドリルをすることもありますが、そこでも感心させられる発言を聞くことができました。ある生徒がいろいろな一桁の足し算をしながら、「 $4 + 6$ は簡単や」と言いました。そのページには $2 + 3$ や $1 + 2$ といったもっと簡単そうな問題もあったので、そう言ったのはなぜかと問うてみました。すると、「6から1だけ4に移すと $5 + 5$ になり、10だとすぐにわかる」と答えてくれました。みんなもっともな理論を教えてくれ、感心させられることの多い日々です。

		6	1		
	4	5	6	2	
5	6		ア	1	2
3	2			4	6
	1	3	2	6	
		2	4		

図1

(もんだい)

3	2	1			
				5	
4		3	2		
5	4				
				1	

図2

トンキチ、チンペイ、カンタの3人はそれぞれお昼ごはんを食べに行きました。3人のそれぞれの発言から、それぞれの今日の昼食を当ててください。ただし、カレーライス、ラーメン、そばのうちから3人とも別々のものを食べました。
 トンキチ：「…」
 チンペイ：「あいつみたいにそばだったら僕は足りないな。」
 カンタ：「僕はカレーライスもそばも嫌いなんだ。」

図3

(文責 浅野直樹)

このかず2年クラスは、浅野先生と共同担当ではありますが、私の方からは、自身の目に映った子どもたちの様子のあるひとコマを紹介し、それについて感じたことを簡単に綴っていきたくと思います。このクラスでは、私と浅野先生が交互に教材を準備し、私は絵をモチーフにした迷路や、「線つなぎ」、「ブロック分け」、「ミニ数独」といったパズル、そして間違い探しを主として用いました。こうした教材に子どもたちは取り組むわけですが、私が何よりも興味深かったのは、子どもたちの思考の多様性です。春学期を通じて感じたことですが、同じ「迷路」や「パズル」、「間違い探し」に取り組むにもかかわらず、子どもたちの解き方、考え方は実に様々です。ある子は、迷路をスタートからゴールまで、何度も戻りながらも素直に解いていきます。一方で他のある子は、迷ったらゴールから逆に進んで、正解を導こうとしていました。また間違い探しにおいても、ある一点にこだわって間違いを探す子もいれば、他の子と相談して様々な角度から間違いを見つけようとする子もいます。

こうした解き方に対して、自らのポリシーや最善の方法を重視する方法もあるとは思いますが、確かに、学校、ひいては山の学校においても、時間や他の子どもたちの進捗具合などとの兼ね合いから、多様性をそのような一定の方向（例えば最も効率の良い解法など）に導かざるを得ない側面がありますし（これは去年担当したクラスでも感じたことですが）、それは「教える」ということの大きな意義の1つだと私は思います。ただ重要なのは、その多様性を尊重するという前提の上で効率の良い解き方へと導くということではないでしょうか。それは、単に一辺倒な解法の伝達によって多様性の可能性を途絶させずに、まず「自ら考える」という習慣をも「教える」ということになりすし、またそれは「教えられる＝学ぶ」側の意義にもなることだと思えます。

以上はやや抽象的な話でしたが、実践として、私は子どもたちの解き方をなるだけ否定しないようにしています。私の意図とは違う解き方をしても、できるだけその考え方で解けるようにアドヴァイスをしています。それが時には子どもたちの混乱を招き、問題を解くこと自体を困難にしてしまうこともあります。ただそれでも、自ら考えたという結果こそが重要だと、私は思うのです。

かくの如く考えさせるクラスであると同時に、このクラスは、私にとって緊張のするクラスでした。小学校2年生という低学年を担当するのは初めてでしたし、何よりも、遊び盛りでわんぱくな男の子たち7名と同じ時間・場所を過ごすというのは、私の人生において稀有な事態でした。そんな中非常に助かったのは、浅野先生という山の学校の先輩との共同担当であったことでしょうか。2人で教材やクラスのあり方について話し合いながら、何とかこの春学期が進んでこられたのだと思えます。

(文責 岸本廣大)

『かず』 3年生A 担当 岸本^{こうた}廣大

このクラスは、私が今まで担当したどの小学生クラスとも状況がだいぶ異なります。少々寂しいことに受講している子どもさんは女の子1人で、時に隣のクラスから、小学校1年生の元気な声が響くほど、静かな雰囲気なクラスなのです。ですが、それはデメリットばかりを含むものではありません。それによるメリットも多いのだと、春学期を通じて私は感じている次第です。この山びこ通信では、そうしたメリットについて、日常のクラスの様子を振り返りながら、述べていきたくと思います。

このクラスでは、前半に迷路やパズル、間違い探しといった頭の体操をしてもらい、後半にドリルや苦手な分野の勉強に取り組んでいます。前半の頭の体操では、様々な問題を通して、じっくりと自ら考えてもらうようにしています。ここでメリットが一つ。複数人のクラスではどうしても他人の状況が気になり、「相手よりも早く解こう」、「遅かったら悔しい」といった感情が、意識的であれ無意識であれ、生じるものです。それを力に換えられる子もいるのですが、それによって自分のペースを保つのが困難になる子がいるのも事実です。そういった子は、自分のペースで解くことのできるこのクラスの方が向いているでしょう。このクラスの子もそのようなタイプだと私は思っています。実際、私が準備した教材をほとんど自分の力で解くことができているし、解けた時の笑顔は非常に印象的です。ただどうしても解けない問題もありました。こういった時、その子に一番適したヒントを出したり、一緒に考えたりして柔軟に対応できるのも、このクラスのメリットです。

後半では春学期を通して、苦手な「時計と時間」について勉強しました。この時点で既にメリットが生じます。複数人のクラスでは、もちろん苦手分野は子どもによって様々で、十分な対応ができない、少なくとも等閑になりがちです。しかし、今回は保護者の方のお話もあって、この単元について腰を据えてじっくりと学ぶことが可能となりました。「時計は読めるが、『時刻』と『時間』との区別は曖昧」、また「単位の変換が苦手」というように、できることとできないことを、直に子どもさんから把握し、

それに応じた勉強を行うというスタイルが取れることが、このクラスのメリットなのは間違いありません。

以上のように、簡単ではありますが、春学期の様子を振り返ってみました。ここで私が主張しているのは「一対一の方が絶対的に良い」というものではありません。重要なのは「小学生1人のクラスでも楽しく学べる」ということです。私は、小学生という時期は同級生や年の近い子どもたちと共に学ぶこと、それ自体が楽しめる時期だと思えます。ただ今回は残念なことにクラスは1人でした。それでも、せっかくお山に上ってきてくれる子どもさんには楽しく学んで欲しいという思いがあります。至らない点もあるかもしれませんが、一時でも山の学校でのクラスを楽しんでくれるよう、今後も努力しようと思えます。

(文責 岸本廣大)

『かず』 3年生B

う え お ま き み ち
担当 上尾真道

春から始まったこのクラスには、元気いっぱいの子供たちが集まりました。最初の授業では、子供たち自身の発案から、これから一緒にどうやって、どのような勉強をしていこうかと言う話になり、その積極的な意欲に私も負けていられないと気を引き締めなおしたものです。その結果、授業の前半をドリルを中心とした算数の学習に充て、後半には少し工夫を凝らした面白みのある学習内容を行っていかうということに決まりました。

前半の時間に要求されるのは、自分の目の前にある課題に集中して取り組むこと、問題を繰り返し解き自分が既にできることを確実なものへと仕上げていくこと、そして自分にとってまだ不確かなことに挑戦し頭を悩ませることです。生徒は四人いますが、もちろん、それぞれに得意なこと、苦手なこと、そして大事だと思っていることも違っているようです。一人の子は2年生の復習を徹底的にこなしています。別の子は3年生になって新たに習う事柄に果敢に挑戦しています。集中力が続かなかつたり、難しい問題に足止めされたりして、時には、それぞれ思うように進まないときもありますが、それでもなんとか時間いっぱい機にかじりつき、じわじわと前に進んでいます。そのような時は私も粘り強く見守るようにしています。

この前半の時間のためには、基本のご家庭でドリルを用意してもらっていますが、私の方でも足し算・引き算・掛け算などのプリントを数枚用意するようにしています。子供たちにとっては、何の問題をやるのか以前に、自分がどのような媒体と向き合うかも重要なようで、私のプリントをしたがる子もいれば、ドリルのほうが良いという子もいます。そうした拘りのひとつひとつを汲み取ることで、子供たちの勉強への関心を上手に導いていきたいものだと考えています。

うってかわって後半の時間は楽しく学習する時間となります。ここでは数に関するパズルやゲームを導入して、それぞれの知的な好奇心を引き伸ばしたいと考えています。例えば、数字当てゲームは、互いに3ケタの数字を隠しておき、それを当てあうというものです。このとき相手に数字を言われたほうは、ケタの場所まで同じ数字があれば、その数の分だけ、1ボックス、2ボックスと相手に教えます。ケタの場所は違ってその数字が含まれていれば、その数の分だけ、1ヒット、2ヒットと教えます。例えば、隠している数が123で、相手に324と言われた場合、隠しているほうは1ボックス1ヒットと答えます。このようなヒントから推理しながら、正解へと近づいていくゲームです。他にもなるべく様々な趣向を凝らして毎回課題を出し、楽しみながら、かずや論理に親しんでいけるようにしています。時に楽しむことのほうにエネルギーが傾けられがちですが、その元気を、かずの世界への好奇心とうまく融合するよう導きながら、子供たちを見守りたいと考えています。

(文責 上尾真道)

『かず』 3・4年生

う え お ま き み ち
担当 上尾真道

このクラスでは、前半を、集中して問題に取り組み、勉強への自身をつけることを目的としたドリルの時間、後半を、楽しめる要素や、ひらめきを必要とするような要素を取り入れた問題やパズル、ゲームなどに取り組む時間として進めています。

前半の時間は、基本的に、ご家庭で用意していただいたドリルを進めてもらっています。また場合に応じて、私が用意したプリントをやってもらうようにもしています。ドリルのほうは子供たちのやりた

いこと次第で、自分の学年の問題を進めていく子もいれば、去年の復習をじっくりと行っている子もいます。プリントのほうは、主に足し算や引き算、掛け算、それから時々文章問題や、ちょっとひらめきの必要な問題なども出しています。この前半の時間の間、子供たちは基本的に黙々と目の前の課題に集中して取り組んでおり、分からないところや不安なところについては積極的に質問してくれます。ゆっくり説明をした後に、「わかった！」と嬉しそうに言って、実際に次の問題を上手に解いていく様は、とても清々しい光景です。

後半の時間には、机に向かってのいわゆるお勉強の形にはとらわれずに、かずへの好奇心を引き伸ばしていくために、パズルやゲーム、クイズなどを取り入れて進めています。毎回、私のほうでやることを用意していくのですが、時には子供たちのほうからこれをやりたいという声があがることもあり、そうした積極性を状況に応じつつ取り入れてもいます。こちらで用意したものでは、かず3年Aのクラスでも行った数字当てゲームや、一筆書きパズルなどがあります。この一筆書きパズルは、実はちょっと意地悪な仕掛けがしてあって、先入観にとらわれると解決できないようになっていました。ところが問題を出したとたん、ある子は最初からこの先入観をものともしない質問を私にぶつけてきました。こうした子供の発想力の柔軟さには、本当に深く感心させられます。それでもやはりじっくりと頭を使わないと解けないこの難問の前で、子供たちはしばらく頭をひねっていましたが、私が少しずつ出していくヒントを総合しながら、解決のほうへと近づいていきました。時間内に解けた子もいれば、残念ながら時間切れになった子もいましたが、それでも解けなかった子が次の時間に「解けたよー」と言って見せてくれたときには、考える意欲が、山の学校が終わってからもずっと持続していたことに、またまた感心させられてしまいました。

かずの授業で出てくる課題は、それらひとつひとつは些細な課題ですが、しかし、そのひとつひとつの問題を解くことのうちにある発見の喜びと自信は、算数だけでなく、人生そのものにとっても大きな意味があることと思います。このクラスが子供たちのそうした成長にとって助けとなるようお願いながら、これからも授業に取り組んでいきます。

(文責 上尾真道)

『かず』 4年生

担当 福西亮馬

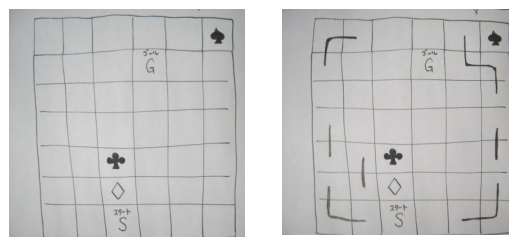
このクラスでは、Sちゃんとマンツーマンでしています。1年生の頃、Sちゃんは後半の30分からでもぜひということ、参加されていました。そのように熱心に通ってきてくれた時のことを思い出します。今は1時間たっぷりとあります。だからこそあの頃にもう一度立ち返って、有意義に取り組んでいきたいと思っています。

Sちゃんの問題の解き方を見ていると、岸本先生に以前お聞きしたことで、ぜひとも称揚したいことがあります。それは、いかに複雑な問題であっても、偶然に頼らずいつでも論理的に解こうとする姿勢です。パズルや迷路などで特にそれが見られるのですが、A、B、Cと別れ道があった時には、AとBの道がまずありえないことを確かめてから、Cの道へと進んでいます。Sちゃんはそのような努力をむしろすすんで取り入れてくれているように思います。

ここで少し私の考えを述べさせていただくと、算数が苦手になる一つの原因は、自分の思い込んだ答と正しい答とがしばしば一致しないことから来る戸惑い、つまり勘違いの積み重ねにあるものと感じられます。そして、たぶん自分がこうも思っている、実際に頭を働かせてみると予想外の結果が出てくることは、算数では日常茶飯事です。それを面白く感じられるか、「あ、まただ、いやだなあ…」と感じるかは、今後算数の問題へトライし続けるかどうかの分かれ目にもなるでしょう。

そこで学期に一度は、なるべく事実が予想とずれるような算数のテーマを選んで、Sちゃんにその論理の力で検証してもらうことを考えました。今学期は、ちょうど学校で円や立方体を習い始めている時期ということもあり、小学生にもわりと触れやすい幾何学のテーマから「オイラーの多面体定理」というものを紹介しました。2年生程度の計算で確かめた事実の積み重ねが、全く予想とは異なった法則性をもたらすというものですが、これについてはブログに詳しく記録いたしましたので、そちらをぜひご覧下さい。

さて、最近では再びパズルに戻っています。Sちゃんは写真にあるような迷路が好きようです。そして、その問題を渡されるや否や、早速自信のある手つきで、「必ず通る」ところから線を引き始めます。そうすると、後はその断片をつないでいくだけの作業になり、行き当たりばったりに進むよりもはるかに試行錯誤が少なくなります。つまり、



(トランプのところは通らず、他のマスをも1回ずつ通ってゴールする迷路。右がSちゃんのやり方です)

これが「論理性」です。

ただし論理はいつでも万能というわけではありません。試行錯誤にあえて飛び込む勇気を持たないといけない問題もあります。そのような事態にも少しずつ慣れてもらおうと思って、一つに「5クイーン問題」というものをしました。これは5×5の盤の上に、同じ列（縦横）には1人だけしかクイーンがないように、計5人のクイーンを置くという問題です。Sちゃんはそのすべてのパターンを見つけ、駒の配置を少し変化させるだけで意外と多くのパターンが作り出せるというところに興味を持ってくれたようでした。この問題のオリジナルではクイーンは8つなので、それにもいつかまた取り組んでみたいと思います。

(文責 福西亮馬)

『かず』 5年生

担当 福西亮馬

春学期は、昨年からのパズルと、かけ算にちなんだ方眼紙の工作に取り組みました。パズルは「かけ算ロジック」と、「箱詰めパズル」が中心です。いずれも九九の応用、あるいは拡張で、色々な方面でかけ算が使われることを意識して取り入れました。

「かけ算ロジック」は、以前はあまり好きと言う生徒がいなかったのですが、さすがに学年が上がるにつれて要領が分かってきて、今では「これならもっと出して！」と催促されるほどです。特に「絶対いや！」と言っていた生徒が「次の問題、ほしいほしい！」と言ってくれるので、嬉しく思っています。

「箱詰めパズル」でも、「1、2、3…」とマス目を一つずつ数えていた光景がいつの間にかなくなり、「縦×横」で考えるようになってきました。そこで徐々に全体のマス目を大きくし、39や60といった大きな箱を詰めることをしました。これには必ずできるという信念が大事です。そしてうんうんうなっていた生徒が、「できた！」と言った時に見せる表情は朗らかで、いったんできると、それまで「ヒントちょうだい！」と言っていた生徒でも、決まって「絶対他の人には答を見せんといてや！」と言うようになる点が愉快です。

また同じ「箱詰めパズル」では、割り算を駆使する姿もだんだんと見られるようになってきました。「39って何かける何？」と聞くのは、理想とする段階の一つ手前で、ただ単に「ヒント出して！」という状態よりはるかに前進です。そこで最初のうちは3で割り切れる可能性を示唆して補助することもあります。もちろんあとは自分で計算して $39 \div 3 = 13$ を確かめてもらいます。今まで九九の範囲でしか考えなかったところから、積極的に筆算を使って難局を抜け出すことには、おそらく授業だけで取り組もうとすると、あと何回分もかかるだろうと思いますが、焦らずにできる時を待とうと思います。

去年、文章題に取り組んで、何が一番のつまづきだったかと言うと、立てるべき式が $60 \div 4$ といった九九では再現できない割り算のような、自身が見慣れない計算の場合、式の意味を考えずに当てずっぽうに 60×4 などとしてしまうことでした。そのようなミスをしないうえにも、線図を取り入れた経緯がありますが、その線図をかくこと自体にも、割り算の一つ手前から、小さなものを集めて元に戻すといった、「かけ算のイメージ」に支えられている必要があるとつねづね感じていました。算数では足し算からかけ算へ、かけ算から割り算への二つの飛躍がありますが、その架け橋にあたるものが、このかけ算です。それなので、意識的なところは計算問題で、無意識的なところはパズルや方眼用紙を使って、かけ算のイメージを強化したいというのが今学期の私の願いです。これから6年生へ向かって分数や面積、速度、割合、そしてそれらを使った文章題へとジャンプするためにも、ここで今一度しっかりと、かけ算でしゃがんでおく必要があるものと考えています。

(文責 福西亮馬)

『かず』 6年生

担当 福西亮馬

このクラスでは、二人の生徒が「論理パズル」に果敢に挑戦してくれています。何より二人が、性格的に似た所ではうまく調和し合っていて、違う所では一目置き合っているのので、目を細めて見ていることができます。「きっと解けるはずだ」という前向きな姿勢も幸いし、それで実際に解けてしまうので、ますます好循環が生まれるのでしょう。

さて授業で取り扱っているのは、たとえば次のような問題です。

問題『ゴブリンの賭けごと』

洞窟の入り口で、4ひきのゴブリンが賭けごとをしていました。すると突然風が吹いて、賭けていた銅貨が混ざってしまいました。そして銅貨の取り合いになりそうなところで、ゴブリンたちは次のように証言しています。

ゴブリンA 「Bは2枚賭けていた」

ゴブリンB 「オレは2枚以下賭けていた」

ゴブリンC 「AもBもオレより多く賭けていた」

ゴブリンD 「AとBの賭け金の合計はオレと同じだった」

ゴブリンA 「Dは3枚賭けていた」

ゴブリンB 「Cは2枚以上賭けていた」

さて、ゴブリンたちの賭けていた銅貨は、それぞれ1枚～4枚で、同じ枚数ではありません。そしてこの中にうそつきが2人存在します（ただし2つに分かれた発言については、証言者がうそつきの場合は、両方うそと見なして下さい）。さて、だれが何枚の銅貨を賭けていたのでしょうか？

この問題のポイントは、ゴブリンの証言がうそ（否定）である時の状況を正確に表すことです。その中で一番混乱しやすい条件は、ゴブリンCの証言についてです。すなわち、「AもBもオレより多かった」の反対（うそ）は、「AもBもオレ以下だった」ではなく（それも含まれますが）、AかBのどちらかがC以下であれば、Cはその時点でうそつきだということです。このような理屈は、誰しもがとつきににくいものですが、それを二人とも集中して突き切ってくれました。

Ku 君は、仮定を立てる際にまず「うそつきの人数」に注目しました。そして4人中2人がうそつきであるパターンを考えました。つまり可能性があるのは、うそつきが「AとB」「AとC」「AとD」「BとC」「BとD」「CとD」の6パターンで全てである、ということです（これは高校数学で習う ${}_4C_2$ という「組み合わせ」の計算です）。そして「もしAとBがうそつきだったら…」というように、順番に仮定を立てて調べていき、その中で1つだけ、AとCがうそつきの仮定の時だけが矛盾がない（それが答えである）ことを証明してくれました。

一方 Ke 君は、Aが正直かうそつきかで場合分けをし、Aがうそつきの場合しかないことをスタートにしていました。しかしそこでまだ終わらず、Aがうそつきだと決まった後にもさらに細かな場合分けが待っていました。もしここで Ke 君の集中力が切れてしまっていたら混乱したかもしれません。しかし Ke 君はじっくり考えた末、「Aがすでにうそつきなのだから、あとうそつきは1人だけしかいない」ということを思い出しました。そして2人目のうそつきがBであるか、Cであるか、Dであるか、の3つのパターンを考えれば、すっかり場合分けができるということにも。

こうして、「Aが3枚、Bが1枚、Cが2枚、Dが4枚」で「AとCがうそつき」ということを、二人ともうまく導き出してくれました。

さて「論理パズル」は、五年生の頃に導入したのですが、二人とも最初の頃の真剣さを忘れず、今の今まで本当によく頑張ってくれています。その蓄積はますます頼もしいものとなってきています。これからも二人の学ぶ姿勢を応援していきたいものです。

（文責 福西亮馬）

『かず』 5・6年生

担当 高木 ^{あきら} 彬

このクラスで大切にしていることは、目の前の問題に真摯に取り組むということです。もしも自分が、苦手なこと、後回しにしたいことに会ったとしても、そこから逃げずに、ひとつひとつ相對していけば、かならず自信の糧へと変えていくことができます。そこには強い忍耐力と、周囲の状況に負けない精神力が必要ですが、それを鍛えることが、「かず」に限らず、すべての学びにおいて、真摯な姿勢を築くこととなります。

このクラスの生徒は、それぞれにこうした貴い姿勢を持っておられます。もちろん最初はだれでも気が進まないものです。間違い探しやマッチ棒パズルで行き詰まるとすぐにヒントを求めようとしたり、計算問題で間違いを指摘されると、これくらい構わないじゃないかという気持ちになったり、ドリルで苦手なページに出くわすと、そこを飛ばそうとしたり、自分の実学年よりも下の学年の復習を疎ましく思ったり。しかしそこで逃げないで、無心になって取り組むことの大切さを伝えると、彼／彼女らは皆、それに一生懸命に答えてくれます。そしてそれを克服してくれたときはいつだって最高の笑顔を見せてくれます。こうした体験の積み重ねが、「かず」への自信に繋がると、私は信じています。

山の学校 weblog の5月8日の記事で山下太郎先生からいただいたコメントには、「このクラスのみならず、一人一人、『えらいな』と思える何かを発揮しているようですね」とありました。本当にその通りだと思いました。そうした彼／彼女らの貴さを、この一年間をかけて、守り、育てていきたいと思えます。

（文責 高木 彬）

昨年に引き続き、中学校1年生の英語を任されましたが、私には、中学校1年生の英語は重要であると同時にそれを教えることは非常に繊細なものであるという思いがあります。この山びこ通信では、普段のクラスの取り組みを紹介しつつ、中学校1年生の英語の重要性と繊細さについて、私見を述べさせてもらおうと思います。

今回受講してくれている生徒さんは、昨年度末のプレ英語を受けてくれたので、すんなりとクラスに馴染んでくれました。国際化が進んだ現代とはいえ、英語は我々にとって異質な言語ですし、何よりも初めて本格的に学ぶ外国語です。その導入において、基礎中の基礎たるアルファベットが完璧に諳んじられ、会話や身近な単語を通してその違和感を最小限に抑えられたのは、非常に幸先のよいことでしょう。

とはいっても、いきなり学校でも未習の文法的事項を進めていくことには、大きな躊躇いがありました。それは山の学校という場が、学校で分からなかったことや疑問に思ったことを共に解消していく場であるという私なりの原則と、後述の意図によるものです。そこで最初の3回ほどは、英会話のCDを聴きながら、プレ英語よりもやや高度な会話の実践を行いました。詳細はブログにもありますが、“Will you ~?”などの表現の例文を聴き、読むだけでなく、新たな例文を日本語から作り、それを私との間で会話として交わすことが主となります。この取り組みでは、用いた例文を覚えることが必ずしも重要ではありません。英語を聴くこと、話すこと、読むこと、そして日本語から実際に英語を作ることがどのようなことであるのか、体験によって実感して欲しいという意図があります。例えば“Will you ~?”でしたら、波線部に任意の動詞を入れることで、様々な文が完成するという直感として感じ取って欲しいのです。同時に任意の動詞を調べるために、辞書という、語学学習には必須のアイテムを去年同様活用することにもなります。ただ今年はそれ以上に「品詞」について強調しました。というのも今後の文法学習に当たって重要であるにもかかわらず、学校の教育では（少なくとも私の経験上）触れられる機会が少ないからです。アルファベットが英語の発音の基礎であれば、「名詞」、「動詞」、「形容詞」といった「品詞」は英文法の基礎です。これを意識させるという意味でも、最初の段階で以上のような取り組みを行ったことには意義があると考えています。

同時に、単語の学習にも力を入れています。これについてはブログで常に書いていることなので、ここでの詳述は避けませんが、中学校1年生から単語の重要性を意識してもらうことは、単語を丸暗記する以上に重要なことです。

こうした単語の学習を続けながら、5月以降は実際に文法事項に踏み込んだ学習を行っています。今はまだ、学校の授業でも分からない箇所はないということですが、プリントや問題演習をしながら、小さな積み残しがないように、ゆっくりと進んでいます。初めて触れる外国語であるからこそその重要性と繊細さに留意しつつ、生徒さんに楽しくも意義のあるクラスになっていければと思います。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 高校1年生 担当 岸本^{こうた}廣大

高校生の英語を担当するのは今年度が初めてです。そこで、この山びこ通信では、普段の取り組みについて、迷走しつつ行われた試みを紹介していきたいと思います。

英語は中学生で一通り基本を学習し、高校生ではそれを応用するのだと、私は位置づけています。しかしその応用であるが故に、「基本」つまり中学校における学習がモノをいうのも確かです。受講してくれている生徒さんが高校1年生ということ、文法が苦手で克服したいという要望もあって、このクラスは基本方針を中学校の復習に置くことにしました。

具体的には、まず自身で苦手だと感じていた「to不定詞」について、プリントによる問題演習を行いながら、間違えたところを中心に文法的事項を解説していきます。そしてそこが復習できたら、次に苦手な「関係代名詞」というように一つずつ復習していくのです。ここでその内容に触れることまではしませんが、全体として私が感じたことを述べるなら、例文に即した基礎的問題は良くできるのに対し、少しひねった問題や例文では見慣れない文を用いた問題に弱い傾向がみられました。その理由としては、基礎例文はしっかり頭に入っているが、それに付随する文法事項の理解が弱いという点が挙げられるでしょう。つまり何故そのような例文になるのか、その理由となる文法構造が十分理解されていないのです。そこで最初は答え合わせの要素が強かった解説を、できるだけ文法構造の把握に重点を移した解説を心がけるようになりました。特に従来等閑にされがちな、「品詞」や文を構成する要素（節や句など）といった要素の基本的な説明を丁寧に行い、そこから何故英語での語順はこうなるのか？なぜこのような変化をするのか？といった問題を考えてもらいました。現在進行中の試みであるため、未だその成果が如実に現れているとは言いがたいですが、単なる復習ではなく基層に至る深い復習は、英語に関わらず勉学には重要だと、私は思います。

こうした文法事項の他に、どちらかといえば私から勧めたのが単語の確認です。英語学習には様々な要素があり、どれも重要ですが、最終的には語彙力が重要だというのが私的持論です。故に、その語彙力の養成にこの時期から取り組み習慣化しておくことは、良いことだと考えるのです。その具体策として、毎週10近い単語を私から出題し、次週それについての確認の問題を解いてもらっています。この際私は、ただ単に単語を列挙・提示するのではなく、できるだけ一つ一つの単語の特徴を説明するよう心がけています。時には生徒さんと共に辞書を引いて用例や発音を確認します。それによって、意味だけでなく実際の使い方などにも対応して欲しいと考えているからです。そうした目的に沿って、出題方法に若干の手直しは必要だという反省もありましたが、この試みも概ね英語力に寄与することになるでしょう。

以上のような、地味な取り組みですが、少しずつ生徒さんに合わせて、より良いものにしようと思っています。高校の勉強はもはや楽しいだけでは済まされないかもしれませんが、興味を持てるようなものにできるよう、今後精進を重ねようと思います。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 高校2年生 担当 上尾^{まさみち}真道

高等教育を除く学校制度の中での英語教育は、中学1年生から始まり、それから高校卒業までに実に六年間にもわたって続けられることとなります。しかし、この長い学習期間を通じて、一向に英語が自分にとって身近になっていくという感触は得られなかったというのが、おそらく多くの人が抱いている感覚ではないでしょうか。現在の教育制度の中で、英語はいまだに、もっぱら学校の試験そして大学受験にその目標が設定されているようです。試験でよい点数をとるためには、試験に出題されることに答えられるだけの知識を蓄積することが重要となりますが、しかし、知識をいくら積み重ねたとしても、そこに自らが積極的にかかわろうとする意思が加わるのでなければ、それらの知識はいずれの日にか記憶の古い層の中に埋もれていってしまうでしょう。

ここでいつも忘れないようにしたいのが——どのような外国語についても言えることですが——、今まさにその言語を使って、私たちがいまだ会わぬ誰かが互いに思いを伝え、感情を共有し、また自分のことを表現しようとしているのだということです。語学を学ぶということは、言わば、そうした言語の中で営まれている人々の生の一端に触れようとするのだと私は思います。そして、そうした営みに自

分も参加することができるという期待にこそ、語学学習のモーターがあるのだと考えています。それゆえ、このクラスでは基本として、英語という言語の中に含まれている物の捉え方や価値観を通じ英語の世界観を垣間見ること、そしてその中で自らを表現し伝えようとする意欲を育むことを重要視しながら英語学習に取り組んでいます。

それを踏まえ、今学期は改めて単文の基礎を徹底的に固めることを目指しました。単文は最もシンプルな表現形式ですが、そこには既に、まず主役（主語）が登場し、物語の根幹が語られ（述部）、それから必要な脇役たち（目的語や補語）が登場するという、英語に独特な語り方が現れており、おろそかにはできません。こうした表現形式の独特さを意識した上で、それを繰り返し発音し、自分のものにしていくことを授業で取り組んでいます。ある意味でそれは、英語を喋る人のフリをするようにして、英語の型を身に着けていく作業だと言えます。

こうした基礎的訓練の一方で、語彙や文法、慣用表現などの知識も蓄積していく必要があります。これに関しては、まずは学校での課題やこちらで用意した練習問題などを通じて行っています。またイラストを見ながら、それを説明するという練習も行いました。その他にも、関心の向くような英語テキストや時には英語の動画などを使い、英語に積極的に参加していけるように取り組んでいます。

今後も知識に振り回されるのではなく、英語への関心を土台として知識を習得・活用していくことを目指し、指導に取り組みたいです。

（文責 上尾真道）

『英語の基本』 高校1・3年生 担当 浅野直樹

前号の『山びこ通信』では「中学英語」のクラス報告をさせていただきました。今回は「高校英語」ということで話を進めさせていただきます。

このクラスのYさんは中学生のときから熱心に勉強し、今春無事に希望の高校に進学されました。彼女のように中学の範囲の学習をしっかりしてきたなら、高校入学までにある程度の英文が読めるようになっていきます。しかし、たとえ辞書があったとしても、まだどのような英文でも読めるというわけではありません。

その理由の一つには特殊な構文があります。たとえば"**I found it difficult to learn English.**"という文の単語は簡単ですが、構造がやや複雑です。これはS（主語）+V（動詞）+仮O（仮目的語）+C（補語）+真O（真目的語）の文です。**find+O+C**＝「OがCであるとわかる」という使い方がされています。この英文の意味は「私はそれ（＝英語を学ぶこと）が難しいとわかった。」となります。こうした文型の考え方は便利なので、多くの高校で最初に教えられるわけです。

また別の理由として、単語の意味を確定させるためにも文法的な知識が必要だということが挙げられます。これは実際に今学期受けた質問なのですが、"**We made so much waste.**"という文の"**waste**"という語の意味がわかるでしょうか。この語を辞書で引くといろいろな意味が出てきて混乱します。英語に慣れている人ならここでの"**waste**"は構造上名詞のはずだからと、辞書で名詞の項を真っ先に探さずです。そう、ここでは「廃棄物」という意味ですね。辞書で"**waste**"の項目を前から順に読むと動詞の説明が長々と続くので大変です。文全体では「私たちはそれほどたくさんの廃棄物を出したのだ。」という内容を表しています。

このような文法や構文の学習を続けていくと英語の構造が見えてきます。現在高校3年生のSさんはこれまでしっかりと勉強してきた英語の構造にすっかりなじんでいます。"**I saw him enter the store.**"「私は彼がその店に入るのを見た。」という文に違和感を表明してくれたのですから。動詞が"**saw**"と"**enter**"の2つあるのが引かなかったのでしょうか。これは知覚動詞+目的語+動詞の原形という特殊な形ですね。**make**などの使役動詞も形は同じです。別の回には、「比較の範囲は慣用表現が多くて大変だ」とSさんがふと漏らしたこともありました。本当によく見所がわかっています。

こうしたことが俗に言う「英語のセンス」なのでしょうが、決して生まれつきに備わっているものではありません。そうではなくて、英語に特徴的な表現を一つ一つじっくりと考えて自分のものにしていくことで徐々に形作られるものです。そのセンスをすぐに与えることはできませんが、この山の学校でいっしょに考えるお手伝いできればと思っています。

（文責 浅野直樹）

「英語指導・一般」クラスとは何をしているのかわかりづらいかもしれません。「一般」という語にそれほど強い意味はなく、大学生以上のクラスを便宜上そう呼んでいます。中身もそれぞれの要望に応じて様々です。このクラスではこれまでのところ、英検を受けたいという大学生を対象としています。それが一段落した後は、さらに実用的な英語力を磨くか、それとも興味に応じた作品を読み進めるかは未定です。大学生以上の方で英語に興味がある（英検・TOEIC・TOEFLを受験する、原典で読みたい作品がある、最新の英語論文についていきたい、今は英語が苦手だけれども基礎から始めてある程度読めるようになりたいなど）方がいらっしゃいましたらお問い合わせください。可能な限り対応させていただきます。

話をこのクラスに戻しましょう。このクラスの生徒であるAさんは英文学専攻の大学一年生です。すでに英検2級は取得済みで、自分の英語力を試すために準1級に挑戦したいとのことでした。ちなみに英検2級は高校卒業レベル、準1級は大学レベルです。試しに英検準1級の過去問をしてみると、知らない語の多さに圧倒されたようです。Aさんの場合は英語の文法や構文は一通り十分に身につけており、またいわゆる読解力も備わっているため、あとは語彙力さえついていけば合格できるという状態です。一般的に高校までの範囲をしっかりと学習すると辞書さえあればどのような英文も読めるようにはなりません。しかし例えば英字新聞などを読もうとすると辞書を何度も何度も引かなくてはなりません。それでは話の内容を追うのに支障をきたしますし、ストレスがたまりま

す。それでは語彙を増やすためにはどうすればよいのでしょうか。新しい語を覚えるのだという意識を保ちつつ、いろいろな角度から取り組むのがベストだと思います。まず文章中で出会った未知の語を蛍光ペンでなぞるか紙に書き出すかして覚えるのが一つ。また好みに応じて市販の単語集などを活用するのも一つの方法でしょう。そしてオススメしているのが語源的に考えることです。有名な例を挙げると、"import"はin（中に）+port（運ぶ）で「～を輸入する」、反対に"export"はex（外に）+port（運ぶ）で「～を輸出する」、"portable"はport（運ぶ）+able（できる）で「持ち運べる」です。一風変わったものとしては、"opportunity"はop（～に向かって）+port（運ぶ）+unity（名詞）で「（港に向かって風が吹く）好機」などがあります。この考え方を応用すれば英作文で綴りを迷ったときにも合理的に推測することもできます。そして実はおなじみの"important"はim（中に）+port（運ぶ）+ant（形容詞）で「（中に運ぶほど）重要な」です。よく知っている語でも意外な語源があったりしておもしろいです。

（文責 浅野直樹）

英語を学ぶ極意（秘伝）——語学は「暗写」——

文・山下太郎

- 1 教科書を「音読」する
発音に自信がなければ、辞書をひく。
- 2 教科書を「筆写」する
自分で書いた文章を自分で厳しくチェックする。
- 3 教科書を「暗唱」する
何度も音読すれば暗唱は必ずできる。
- 4 教科書を見ずに教科書の内容を正確に書けるようにする。
- 5 辞書を引く
慣れたら英英辞典を使う。

上は4年ほど前にブログに書いた内容です。自分が英語を学び、教えた経験に基づいています。英語の勉強法は「人の数だけ方法あり」だと思います。方法の確立していない人は（本屋でうろろうする人は）上の方法を参考にしてください（といった程度の話です）。ただ、「暗唱」はキーになるとは思います。ちなみに、私は幼稚園時代に俳句を暗唱し、小学校から高校は『論語』と『老子』を暗唱し（させられ）、英語は中学・高校時代に暗

唱だけでなく、上に書いた「暗写」を徹底的に実践しました。その経験は英語だけでなく他の外国語や古典語の習得に生きました。じつは英語の「暗写」は、自分で編み出した学習法でした。私は運に恵まれており、小田幸信先生（情熱の英語教育者）の私塾で学びました。はじめて手にした教科書は英語しか書いていない Lado English。先生は申し訳程度にしか日本語を使われません。宿題はカセットテープ一本ディクテーション（英語の書き取り）など。試験は、習った範囲について英語で質問があり、答えは英語で書きます。悪い点数が続くと除名。5名の定員ですが除名されても次に新しい生徒が次々参加します。試験で満点を目指すなら、教科書の内容を「暗写」するしかなかったのです。その後、古典語を学んだ際、「試験は覚えただけ紙に書いてもらいます」と先生に言われ、「ああ、『暗写』は古典的な勉強方法だったのだ」と悟ることになります。ちなみに私のラテン語の先生は、二日にわたってラテン語を書き続けたという逸話の持ち主です。脱帽。

（文責 山下太郎）

『数の基本』 高校生

担当 浅野直樹

今年度から「高校数学」というクラス名になりました。もっとも、以前から通常は高校に割り当てられる範囲のことをしてはいました。

今学期はクラス名の変更とは裏腹に、中学の内容の大切さを痛感しました。まず式の計算や恒等式の範囲では因数分解をすることが多々あります。不等式の証明では「 $x^2 - xy + y^2 \geq 0$ であることを証明せよ」

という典型的な問題があります。この左辺はそのままの形では因数分解できないので、 $x^2 - xy + \frac{1}{4}y^2 + \frac{3}{4}$

$y^2 \Leftrightarrow (x - \frac{1}{2}y)^2 + \frac{3}{4}y^2$ と変形するとよいのです。左辺 ≥ 0 を証明したいのですから2乗の和の形にすればよいですね。この式変形は二次関数の平方完成と同じ手順です。自分の因数分解する力に自信がないと、最初の式からもしかしたら一発で因数分解できるのではないかと際限なく疑ってしまいがちです。

図形と式の範囲では図形の考え方と式の考え方を何度も往復するので、式の計算でミスがあると面倒なことになります。内分点や外分点、点と直線の距離などを求めることもしばしばですが、これらを求める公式を使えたほうが断然楽です。その都度理論的に求めることもでき、そちらのほうが数学的にしっかりと考えられているとしても、それではあまりに時間と労力がかかります。公式というものはそうした手間を省くために先人が考え出した便利な道具ですので、盲目的に使うのはよくないですが、納得の上で使えるとよいです。

このクラスの生徒たちは数学的なセンスがあり、考えさえあつていればそれでよいとも思えるのですが、計算や因数分解などの公式といった基礎的な作業につまずくと学校のテストなどでは困ります。テストのことを気にしないとしても、計算などで労力を使うと問題の本質が見えづらくなります。問題を解こうとしてわからなかったときには解答・解説を見ますが、そのときに式変形の計算についていけないとそこで止まってしまいます。解説を読んでもわからないということが数学嫌いになる一つの大きな原因だと言われますが、それぞれの箇所では簡単な計算や公式が使われているだけだということが多々あります。逆に言うと、計算などが楽にできるとものの見方が変わるかもしれません。英語で言うと計算力は語彙力に相当するでしょう。どちらも物事の本質ではないけれども、それがないと本質が見えなくなってしまいます。

数学的な本質の理解と、計算や公式の運用練習はバランスが大切です。このクラスでは数学的な理解をしようとする際に基礎力の欠如が判明したらその練習をするという順序で進めており、両者の関係を意識しながら取り組んでいます。

『古文講読』

担当 前川 ^{ゆたか}裕

今期の古文講読は引き続いて『徒然草』を読んでいます。お一人のご参加ですが、毎回丁寧に準備をされていることもあり順調に進んでいます。すでに上巻を読了し、引き続き下巻を読み進めています。通して読んでいくことで、「こういう表現が前にもあった」「この内容は、よく出てくるようだ」といった気づきも与えられ、一つ一つを個別に読むのとは違った楽しみ方ができていると思います。しかし驚かされるのは、現代にそのまま当てはまるような思想、考え方が沢山見つかることです。兼好がいかにも人間洞察力に優れていたかということに改めて感服するとともに、現代の問題を千年前の視点から改めて捉え直す機会ともなっています。

継続して取り組んでいます。途中からの参加に問題はありません。ぜひ一緒に、古典随筆の世界を味わってみませんか。

(文責 前川 裕)

『ラテン語初級文法』 A

担当 前川 裕^{ゆたか}

このクラスでは今回から山の学校オリジナルの教科書『速修ラテン語文法』を使っています。これは「まずはラテン語文法全体を知りたい」という方向けに山の学校のカリキュラム（1学期12回）に合わせて内容を調整したものです。練習問題も少なめにしていますので、取り組みやすくなっています。しかし一通り終えれば、原文を読むための基礎的な知識は得られます。

今期はお二人の参加です。いずれもご年配の方々ですが、毎回着実に進んでいかれています。予習をお願いし、その内容をもう一度講義した上で、練習問題の解答・解説を行っています。不明な点が残らないように、疑問・質問を丁寧に解消していくように意識して授業を進めています。ゆっくり目に進むコースといえるでしょう。

ラテン語は、もちろん外国語ですから覚えるべきこと・学ぶべきことはあります。しかしテストに追われるわけでもなく、自分のペースで楽しみながら学習することができます。ラテン語の文法を学ぶと、他の外国語との関連など、新しい気付きを与えられることも多々あります。あなたもラテン語を始めてみませんか。

(文責 前川 裕)

『ラテン語初級文法』 B

担当 山下大吾

このラテン語初級文法 B クラスでは、前学期までのラテン語入門クラスと同じカリキュラムで、すなわち一学期三ヶ月の期間にラテン語文法の基本事項を習得し、主にその後の更なる学習を見据えられた方々を対象に授業が行われています。今学期はお一人が受講されております。

教科書として岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を用い、各課に挙げられた文法事項を確認後、練習問題のラテン語を日本語に訳して頂きます。残念ながら時間の関係で和文羅訳問題は授業内では行われておりませんが、担当講師が作成した試訳をお渡しして、後日その他の質問と纏めてお答えするよう努力しております。

今学期は受講生がお一人ということもあり、疑問に思われた箇所は気兼ねなく質問されるようこちらからお願いいたしました。訳読の量など従来の倍近くになることから、負担が重くなってしまうのではないかと心配していましたが、今のところ当初のプログラム通り進んでおります。ドイツ語既習者でいらっしゃることも大きな利点になっており、それぞれの格の機能など、両言語に共通する項目は難なく理解されたように見受けられます。同時にラテン語で見られる特徴的な子音同化や母音交代の現象に興味を抱かれたようです。

ラテン語は初歩の段階から覚えるべき項目が比較的多く、「わずらわしい」言葉といえるかも知れません。しかしその言葉で記されたキケローやウェルギリウスなどの古典作品を味読する楽しみは何ものにも代えられません。永遠の財産に触れ、我がものとする喜びをかみしめつつ、受講生の方と共にゴールを目指し毎週楽しく真剣に授業を行っています。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読』 A

担当 山下大吾

ラテン語初級講読 A は今学期から開講されました。受講生は前学期ラテン語入門コースを履修された方一名です。当座のテキストとして、受講生のご希望を伺った上で、キケローの『国家について』に収められた、伝説上のローマ歴代の王について書かれた箇所を初学者用に編集したものを採用しています。テキストに対応した語彙集と注釈をお渡しし、時に和訳も参照しながら読み進めております。

口を半開きにして立ち、いささか警戒の眼差しでこちらを向いている狼。その乳房に吸い付く二人の幼子。このような像を目にされた方、また幼子がローマ初代の王ロームルスとその双子の兄弟レムスであることをご存じの方も多いかと思われます。この伝説は上述の作品ではエピソードとして触れられるに過ぎず、語にして僅か 9 語しかありません。また狼は「森の獣」として記されています。このような知識を得られるのも、原文を読む、原文で読むことの利点と言えるのではないのでしょうか。

初学者用に編集されたテキストとはいえ、話の本筋に影響を与えない箇所を省くなどその規模は最小限に抑えられており、「本物」のキケローのテキストとほとんど変わりがありません。受講生の方も、入門コースならではの「少年が少女にバラを送った」といった短文に見慣れていたためでしょうか、関係代名詞や接続詞が頻繁に現れ、ピリオドが中々見えてこない長文を相手にすることはやはり少々大変だったようです。しかしロームルスは無事読み終え、二代目の王であるヌマの逸話も終わりに近づいています。今後はキケローの書簡に取り組む予定です。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読』 B

担当 山下大吾

ラテン語初級講読 B では前学期に引き続きキケローの対話編『老年について』を読み進めております。受講生は今学期途中からお一人増えて二名になりました。五月終了時点で全体の三割強を読み終えました。

大カトーの熱弁は対話者であるラエリウスとスキピオの存在をいつしか背景に押しやる程となり、老年に対して巷間語られる不平の理由を四つに分け、その一つ一つについて反論していきます。現在までにその第一の理由、公の活動から遠ざけてしまうという見解に対する反論を読み終え、第二の場面に入りました。反論の証拠としてギリシア、ローマ先人のエピソードに加え大カトー自身の経験も惜しげなく披露され、時に挿まれる韻文作品からの引用もよきアクセントとなっており興味は尽きません。また重要な話題であるにも拘らず、よくよく考えると必ずしも現在の論旨と一致しているものではないテーマをさりげなく取り上げるところなどに、弁論家キケロー一流の構成の妙を見る思いがいたします。

今のところ授業の進め方は、前学期と同じく、少なくとも授業内では各国語訳に頼らずテキストを訳読していく方針をとっています。文法事項の確認も勿論ですが、ラテン語ならではの表現方法にも気を配って読み進めています。なおこの作品用に編纂された語彙集を受講生の方々にお渡ししたところ、訳読のペースは格段に改善されました。ラテン語に限らず語彙の習得が外国語学習にとって如何に大切なものか、さらにラテン語では、辞書に載っている数ある語彙からテキストに適したものを選び出す作業が、特に初学者にとり如何に大変なものか、改めて痛感した次第です。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読』 C

担当 前川 裕 ゆたか

今学期は社会人お二人の参加で、引き続いてセネカ『ルキリウスへの手紙』を読んでいます。面白そうな内容のものを適宜ピックアップして読んでおり、現在は第 19 書簡を扱っています。ロエブ叢書のテキストを基本に、ビュデ版、また日本語訳も必要に応じ参照しています。手紙の形を取った哲学書と言われますが、比較的短い中にまとまった考えが書かれていますので、初期に読むのにも向いているのではないかと考えています。

翻訳も利用しながらというのは賛否あるところですが、このクラスでは取り組みやすさを優先しています。もちろん訳が分かれば終わりということではなく、原文ではどのようなになっているか、日本語翻訳との構造上の違いは何か、などの考察を通して、ラテン語そのものの発想を学ぶ上でも大いに参考になっています。

基本的に毎学期で完結するよう、読む内容を調節しています。ご興味のある方はぜひお問い合わせください。

(文責 前川 裕)

『ラテン語中級講読』

担当 広川直幸

この授業では引き続きウェルギリウス『農耕詩』を読んでいる。原文の音を味わい修辞を味わうことに重きを置いている。どちらも訳読の授業ではすっぽりと抜け落ちてしまうものである。

授業内容についてはこれだけにとどめ、以前から感じていたことを一つ書いてみようと思う。外国語講読の際の翻訳の扱いについてである。外国語で書かれた作品を読む際に、きまって言われるのが、辞書を引け註釈を読めということである。翻訳を読めと授業でいわれるのを聞いたためしがない。翻訳はなるべく読まないほうがよいもの、読むとしてもこっそり読むものと考えられているようである。私は授業中に翻訳を机の上においている学生が叱られるのを目にしたことがある。

これは全くの逆立ちである。本来、外国語の古典を読む際には大いに翻訳を参照し、辞書と註釈はできるだけ使わないほうがよいのである。理由はいくらかもあるが、紙幅が許さないのでは今は述べない。ただ、翻訳を読んで原文を理解することを悪とする態度は改められてしかるべきであるとだけ述べておこう。お前ごときが何を馬鹿なことと思う人には言うておこう。これはブルクハルトが言っていることであり山田晶が言っていることでもあるのだと。シュリーマンも外国語を習得する際には大いに翻訳を利用した。

なぜ翻訳を参照することを忌み嫌うのか。答えは簡単である。翻訳を答えであると勘違いしているのである。訳読の授業とはこれほどまでに逆立ちしているのである。

(文責 広川直幸)

第16回 ラテン語のゆうべ

とき 8月28日(金)

午後6:30~8:00(参加無料)

講師 山下大吾(山の学校ラテン語講師)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

演題 『漱石から入るラテン語』

対象 ラテン語に関心のある方

『ギリシア語入門』

担当 広川直幸

今年も春の訪れとともに山の学校で古典ギリシア語の授業が開講されました。今年度も昨年度同様、水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を教科書とし、一回に一課のゆっくりとした速度で進めています。全36課の教科書を一年かけて終える予定です。

今年度も相変わらず変化表の練習に明け暮れています。理由は一つ。変化表を全て正確に体得しないと古典ギリシア語の習得は必ず失敗に終わるからです。多言語習得者として有名なシュリーマンは、学校で長い時間をかけて教えている所謂文法など一切学ばなかったと豪語するのですが、古典ギリシア語を学ぶにあたっては変化表を暗記したと記しています。授業時間の練習だけでは足りません。どうか一日15分でもよいので、変化表の暗記に時間を割いてください。そして、忘れるまで覚えてください。

次に大切なのは語彙の習得です。時間の都合で、授業中には実行できないのですが、作文が非常に役に立ちます。日本人は外国語での作文というとすぐに日本語で考えた抽象的な内容を無理やり外国語に置き換えようとしますが、ここで言う作文とはそういうことではありません。目に見え手で触れられるものを土台に短い文章を作る練習をしていただきたいのです。例えば、花を見たとする。そうしたら「花」とギリシア語で思ってみる。そしてその花について「この花はきれいだ」という具合に簡単な描写を試みる。このような作業を繰り返していると、訳読で得られるような貧弱なものではない、確固とした語彙の土台が出来上がります。是非このような練習をしていただきたいと思います。

(文責 広川直幸)

『ギリシア語講読』

担当 広川直幸

4月からギリシア語講読と称してホメーロスの『イーリアス』を読み始めました。一回に20から30行程度を読んでいます。受講生はお二方とも、昨年度の山の学校の授業で古典ギリシア語の初歩を学ばれた方です。

『イーリアス』は教科書で習うアッティカ方言とは異なる人工的な方言で歌われており、初級の教科書の知識だけでは読めません。ですが、そこはヨーロッパ最古の大叙事詩なので、学生向けの註釈書がいくつも出版されています。それらを利用することで、無理なくホメーロスの言語に慣れていくことが可能です。この授業では P. A. Draper, *Iliad: Book 1* を教科書に指定しました。アッティカ方言とは異なる形態については常に丁寧に註が付されているので、初級文法を終えたばかりの人が手にするのに適した本です。また、辞書を引かなくても読めるように書かれている点がとてもよい。少なくとも語学の初歩の段階で辞書を引きまくるとするのは時間の無駄である以上に有害ですから。

『イーリアス』は全文ヘクサメトロンという詩形で歌われた詩です。詩であるからには音声面の鑑賞をないがしろにしてしまっただけでは、原文で読む意味がありません。この授業ではまず正確に音読できることを目指しています。ホメーロスを音読するにはコツが要ります。現在はそのコツを習得すべく努力しているところです。

『イーリアス』第一歌を読み終わるころには、自力で他の巻を読む力が付いていることでしょう。それを目指して焦らず着実に進んで行きましょう。

(文責 広川直幸)

『ウェブプログラミング入門』

文／山下太郎

「ウェブプログラミングって何をするんですか？」とよく聞かれます。「百聞は一見にしかず」という言葉がありますが、プログラミングばかりは、「見る」より「やる」しかない世界です。かく言う私もこの春からこのクラスの生徒としてプログラミングを一から学びながら、その奥深さに魅せられています。

クラスのタイトルにウェブという言葉がついているのがポイントで、すでにホームページを持っている方なら、単に HTML を書くだけで満足できないのではないのでしょうか。プログラミングの知識があるとブログや掲示板などを自分流にカスタマイズできます。私はその程度の知識しかなかったのですが、このクラスを受講することで、もっと大きなことを実現したいと願っています。イメージしているものは語学学習を支援するプログラムです。生徒が問題を解くほど、自分に最適な問題が提示されるようなシステムを考えています。

千里の道も一歩からというわけで、私が見よう見まねで作った（作ってもらった？）プログラミングの第一弾は、山の学校の「時間割 Cgi」です（<http://www.kitashirakawa.jp/jikanwari.cgi>）。従来は時間割の書き換えの際、ホームページビルダーで一つ一つのクラスのデータを書き換えていましたが、手間の割にミスもあって苦勞していました。この Cgi では、クラス名、時間、曜日のデータをテキストファイルで用意するだけです。更新データをサーバーにアップすると、時間割の HTML ページが瞬時にできあがります。最初はモノクロでしたが、先生のアドバイスで、データをアップロードした時点でクラスごとの背景色が自動的に表示されるようにカスタマイズしました。

プログラミングを学ぶといえば、即戦力養成を重視した専門性の高い授業形態をイメージする人が多いと思います。スポーツで言えば、プロの養成コースといった感じです。それに対し、山の学校のウェブプログラミングのクラスは、親切なコーチが手取り足取り教えてくれるテニススクールのようなイメージです（実際には生徒のレベルに応じてプロレベルのことまで指導して頂けます）。

「プログラミングは専門家のすること」というのが世の常識でしょうし、それを否定するつもりはないのですが、予備知識のない人でも素人なりに学ぶ楽しさを実感できるのがこのクラスのよいところです。何が楽しいのかと言われたら、カプラ（積み木）やひねもす*の楽しさに喩えることができます。否、作った作品は鑑賞するものではなく、電気仕掛けで思いのままに動き出すのです。そして、ちょっとした仕事を（技術に比例して大きな仕事まで）手伝ってもらえるのです。言うなれば、ドラえもんがポケットから取り出す「ひみつ道具」を自分で作り出すようなものです。こんなに楽しいことはありません。

現在は初心者一人（私）の受講ということで、先生としてはものたりないはずですが、こんなにありがたい環境を私が独り占めしてよいわけはありません。いずれ学友（高校生からシニアまで）が挙って参加されることを願いながら、私自身としては、当面カタツムリのように一步一步進んでいこうと思っています。プログラミングの基本から応用まで、マンツーマンに近い環境でじっくり学びたい方にはうってつけのクラスです。

（山の学校『ウェブプログラミング入門』・受講生からの感想）

*「ひねもす」とは、パイプ状に巻いたチラスを、切ったり、つなぎ合わせたりすることで色々なものを創作する遊びのことで、(株)コトがひねもすキットを2003年に発売して以来、北白川幼稚園では「ひねもす教室」を開設したり、保育の活動に取り入れたりしながら、この手作りの遊びの楽しさをたくさんのお子もたちと分かち合っています。